令和４年度指定　文部科学省事業

「新時代に対応した高等学校改革推進事業」（創造的教育方法実践プログラム）

第３年次　研究開発実施状況報告書

挑め、ともに！

令和７年３月発行

【山形県立小国高等学校】白い森未来探究プロジェクト

背景　少子化の影響による小規模校の増加
課題　小規模校の生徒数・教員数の減少
- 人的リソースが不足
- 生徒の人間関係が固定化
- 多様性が不足
- 生徒同士の切磋琢磨が不足
- 多様な専門性を持つ教員が不足

ICT端末を用いた
遠隔・オンライン教育の活用

各教科の学習

AIドリルによる
個別最適な学び

往還

県外小規模校
との学校横断
型探究学習の
推進

定着UP　意欲　基本的知識　多様性UP

先進的教育方法による
教科等横断的・探究的な学びの質向上

興味・関心が似ている生徒同士が刺激し合い
ながらオンラインで探究学習を深める

期待される成果：
主体性、挑戦心、協働力　向上
「教科学習」「探究学習」「進路希望実現」
個別最適化

テーマに合った専門家の伴走

県外小規模校との
学校横断型探究学習の推進
【岩手県大槌高校】
【熊本県小国高校】
【山形県小国高校】
２年間の連携実績あり

●相互交流　●地域人材による講演
●テーマ別ゼミ　●合同発表会

往還

各教科の学習

AIドリル（Qubena）による個別最適な学び

基本的知識・技能の定着と意欲喚起

別紙様式3

ごあいさつ

令和４年度に文部科学省より「新時代に対応した高等学校改革推進事業」（創造的教育方法実践プログラム）の指定をいただき、「白い森未来探究プログラム」として、① AI 教材の導入による教科学習の個別最適化、② 教科横断的な学びの推進と小規模校連携による探究学習の個別最適化、③ オンラインコミュニティの構築と進学希望者の学びの動機喚起を中心に取り組んでまいりました。多くの皆様よりご助言やご指導、ご協力をいただき、令和６年度も事業に取り組むことが出来ました。この場をお借りして、感謝申し上げます。

３年間の取組を振り返りますと、１年次である令和４年度は、AI 教材を導入することで９割以上の生徒が学習効果や学習意欲の向上があると感じていること、多角的な視野で物事に触れる教科横断的な学びにより教科学習と世の中のつながりを実感できていること、オンラインコミュニティによる学校横断型探究学習により個々の探究学習が充実し深められることという成果が得られました。

２年次である令和５年度は、学校間オンライン探究学習の充実、各教科が協力しながら教科横断的な学びの在り方の研究、AI 教材活用の工夫による進学希望者の学習意欲向上に重点を置き、取り組みました。その結果、生徒が自ら苦手な科目や分野に取組むことができるようになったり、生徒の興味関心を引き出すことができたりした事例が増えてきました。

そして、３年次（最終年）である令和６年度は、令和７年度以降を見据えて、それぞれの取組を改善・充実を図りました。特に教科横断型授業には、全教員が２回以上チャレンジし、それぞれの教科の学習計画の中に位置づけることができ始めています。本校では、この３年間の取組をもとに、次年度以降の教育課程に実装していく所存です。ぜひ報告書をご高覧いただき、ご感想やご意見を頂戴できれば、教職員、生徒、地域の励みになります。

現在、少子化による高等学校の小規模化が全国各地で進行しており、本校もその例に漏れず少人数の生徒と教職員で日々試行錯誤しながら教育活動を展開しております。その取組が、少しでも今後の学校づくりの参考になるのであれば幸いです。

結びとなりますが、本事業の運営指導委員としてご指導いただきました岡崎エミ様、稲垣忠様、阿部剛志様、牛木力様をはじめとして、ご協力ご支援を賜りましたすべての関係者の皆様に心から感謝し、また、今後もご指導賜りますようお願い申し上げ、ごあいさつとさせていただきます。

校長　山科　勝

目次

第1部.事業の概要 1

第2部.事業の詳細

1.AI 導入による教科学習の個別最適化 13

2.教科横断的な学びの推進 16

3.オンラインコミュニティの構築と進学希望者の学びの動機喚起 23

4.教職員研修 28

第3部.事業の評価 32

第4部.今後の取組について 43

第5部.資料

1.運営指導委員会 46

2.成果報告会 48

3.全国高等学校小規模校サミット 49

4.報道 50

第１部
事業の概要

1 研究開発名
令和6年度「新時代に対応した高等学校改革推進事業」
2 指定類型
創造的教育方法実践プログラム
3 期間
令和6年4月1日～令和7年3月31日
4 構想名及び構想の概要

構想名：白い森未来探究プログラム
カリキュラム開発のテーマ：②自分のペースでの学習に着目した学び
構想の概要： ICT端末を用いた遠隔・オンライン教育を活用し、AI教材による個別最適化された学び直しと人的リソースや多様性を生み出しながら行う先進的な県外小規模校横断型探究学習の推進により、課題解決のための思考力・判断力・表現力等の資質・能力の育成を図る。本構想により、小規模校が共通に抱える課題を解決し、教科等横断的な学びの実現により教育効果の最大化を図る。

5 事業の目的等
（1） 本事業に申請する高等学校を取り巻く状況の分析、本事業に取り組む必要性

①本校を取り巻く状況の分析

小国町	・県南西部、新潟県境に位置し、森林面積が 95%以上を占める全国屈指の豪雪地帯 ・人口約 7,000 人の過疎地であり、生徒の地元への定着や地域産業を担う人材輩出への期待が高く、高校廃校への危機感から、高校・地域協働体制が生まれている ・県内隣町から峠越えで 40 分。JR米坂線が令和4年豪雨で不通のため陸の孤島
町の産業	・ブナ原生林の恵みを糧にするマタギ文化が残る町。特産物はワラビ ・豊かな水資源を基盤とした半導体製造と重化学工業に支えられた企業城下町 ・生徒の地元への定着や地域産業を担う人材輩出への期待が高い ・期待する人材像 「起業型人材」地域資源やICTを活用した新しい仕事を生み出せる人 「複業型人材」農、工、土木、観光業などを組み合わせて独自の働き方ができる人 「自己開発型人材」自らの市場価値を自己の責任において向上できる人
町の教育	・保小中高一貫教育（2018 年度～）「郷土理解・情報活用・国際理解」に注力 ・本校生の約 90％が町内中学校出身者 ・保護者は、郷土に愛着を持ち、個々の多様な進路希望の実現に対応できる資質・能力の育成や人間的成長を本校に期待

小規模校としての課題	進路多様校の課題	本校ならではの課題
【生徒の課題】 ・同じ小中学校で育った生徒が９割 ・多様性が乏しく、人間関係が固定化 ・生徒同士の切磋琢磨の機会が少なく、挑戦意欲が乏しい 【教員の課題】 ・１学級化により教員数減 ・専門性を持った教員が指導できないケースもある	進学と就職が約半数ずつ(2022 年度)の進路多様校 ↓ 多様な学力に合わせた授業設計が難しい →大学受験に必要な科目の設置とモチベーションの維持困難	・進学希望者が少ないため、学びのモチベーションを保ちながら自学自習することが難しい

②本事業に取り組む必要性

近年の「全国高等学校小規模校サミット」「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」等を通し、生徒の小規模校への誇りや郷土愛の向上、自分の興味・関心への気づきの高まり、主体性・協働性等が伸びるという成果が見られる。一方で、上記のような課題があり、解決に向け、本事業に取り組む必要性が極めて高い。

(2)　本事業を実施する目的・目標(本事業を通じて育成を目指す資質・能力を含む)

【目的・目標】

ICTやAIなど新しい教育方法を活用し、「教科学習」「探究学習」「進路希望の実現」の個別最適化を実践し、小規模校特有の課題を克服するとともに、本校が育成を目指す資質・能力「主体性」「挑戦心」「協働力」(下表)を生徒が身につけることを目的(アウトカム)とする。また、大目的を達成するために、①～④のアウトプットを設定する。

主体性			挑戦心			協働力		
郷土に誇りと愛着を持ち、学び続けながらより良い地域づくりに主体的に関わる			健康で豊かな人間性を持ち、新たな価値創造に挑む			多様性や個性を認め、他者を尊重しながら協働できる		
自己理解	自己肯定感	学ぶ意欲	情報収集活用力	課題設定力	共感力	受容力	対話力	共創力
計画力	意思ある選択	創造的市民性	思考力	想像力	行動力	持続可能性意識	グローカル意識	
			やり抜く力	伝える力	振り返る力			

①教科学習における理解力と習熟度に応じた個別最適な学びと、単元配列表を活用した教科等横断型授業の実現

○教科等の学習を深め、探究学習との往還を図り、生徒の学習行動の変容をねらう。

【育成を目指す資質・能力】
「計画力」「学ぶ意欲」「やり抜く力」「振り返る力」「思考力」
【具体的な方策】
・AI学習システム（Qubena キュビナ）の導入により、学びなおしと個別学習の実現
・いつ何をどこまで学ぶかを自分で計画する「マイプラン学習タイム」の導入
・自学自習習慣を身につけるためのモチベーション・マネジメントの導入

②小規模校連携構築による人的資源と多様性の確保、探究学習の個別最適化
〇興味・関心を大切にした探究学習の個別最適化を図り、探究を教科横断的に深める。
【育成を目指す資質・能力】
「自己理解」「創造的市民性」「情報収集活用力」「課題設定力」「伝える力」「対話力」
【具体的な方策】
・全国の小規模校との探究学習連携の継続（2020 年度～の実績）
・全国高等学校小規模校サミットで培った全国の小規模校との関係性を軸に、生徒各自のテーマにあった、ア：探究仲間づくり、イ：専門家等からの助言や伴走、ウ：発表とフィードバックの場を構築
・全国高等学校小規模校サミットや研修旅行などによる対面での信頼関係の構築

③オンラインコミュニティ構築による進学希望者の学びの動機喚起と進路実現
〇オンラインで小規模校の生徒がつながり、進学希望の生徒の学習意欲を高める。
【育成を目指す資質・能力】
「学ぶ意欲」「計画力」「意思ある選択」「やり抜く力」「対話力」
【具体的な方策】
・全国の小規模校の進学希望者や大学生による「進学希望者コミュニティ」の構築

④事業成果の発信による全国の小規模校が抱える共通課題の克服
〇全国の小規模高校のモデルとして、本事業の成果を発信・共有を図る。
【具体的な方策】
・全国高等学校小規模校サミットを基軸にした小規模校ネットワークでの情報発信

6 実施体制
（1）管理機関における事業全体の管理体制
・運営指導委員会には、下記の4名の専門家を迎える。

所属	氏名	主な実績
（一財）地域・教育魅力化プラットフォーム	岡崎 エミ	・コミュニティデザイナーとして全国の住民参加のまちづくりを支援 ・「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」企画評価会議委員 ・「COREハイスクールネットワーク構想」運営指導委員 ・「マスターハイスクール事業」高校伴走担当

		・新庄最上ジモト大学運営委員アドバイザー ・元東北芸術工科大学コミュニティーデザイン学科准教授
(一財)つわの学びみらい	牛木 力	・島根県立津和野高等学校で探究学習専門の高校魅力化コーディネーターとしてカリキュラム開発と高校魅力化に参画 ・元東北芸術工科大学 コミュニティーデザイン学科講師 ・「TOMODACHIソフトバンク・リーダーシップ・プログラム」プログラムづくり参画
三菱UFJリサーチ＆コンサルティング	阿部 剛志	・文部科学省「地域との協働による高等学校教育改革推進事業企画評価会議地域魅力化型企画評価部会」協力者 ・「高校魅力化評価システム」を一般社団法人地域・教育魅力化プラットフォームと協働で開発
東北学院大学	稲垣 忠	・文部科学省 初等中等教育段階の SINET 活用実証研究事業委員 ・「児童生徒の情報活用能力の把握に関する調査研究」企画推進委員 ・ICT活用教育アドバイザー委員 ・「教育の情報化に関する手引」作成検討会委員等を歴任

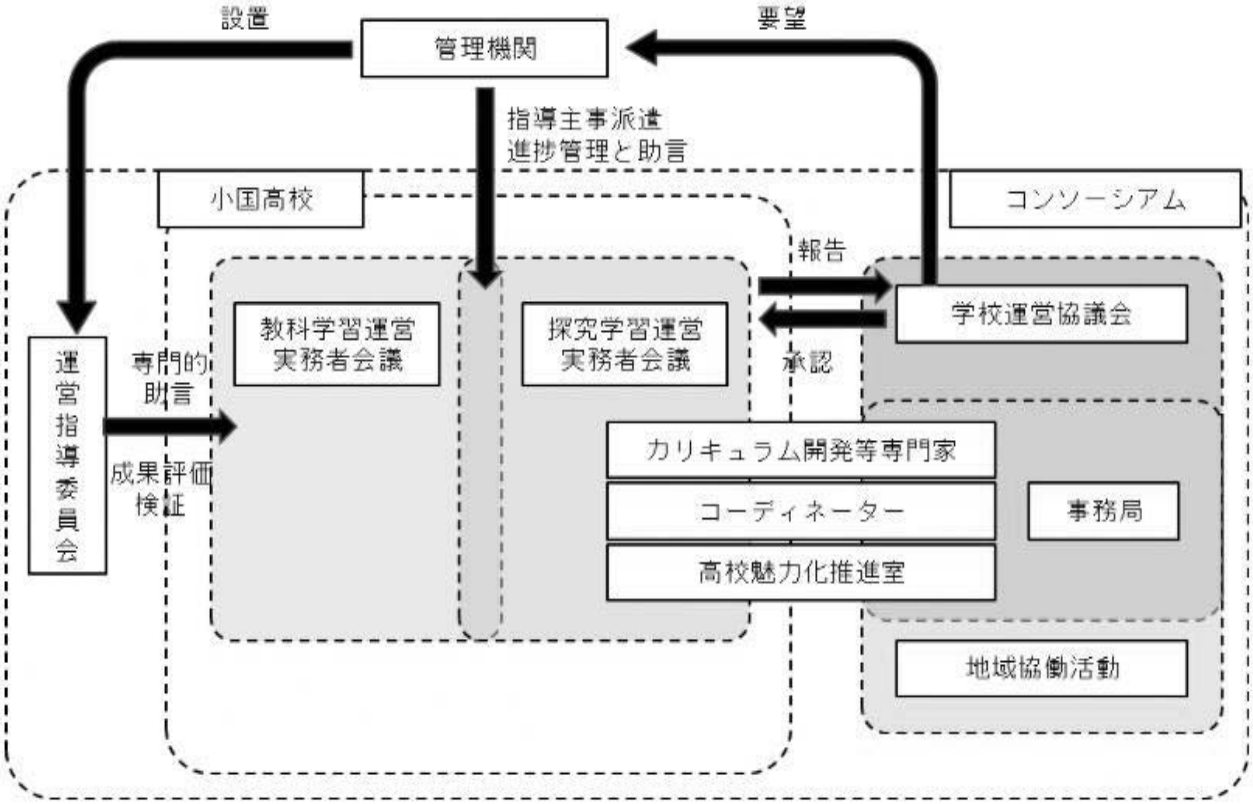
・運営指導委員会は年3回開催。(5月・11 月・2月に実施)

・運営指導委員会は、本事業の運営に関し、事業構想や目的・目標達成の進捗状況等について検証・評価を行うとともに、それぞれの専門的見地から管理機関と本校に対し情報提供と指導・助言及び支援を行う。AIオンライン教材を活用した教科学習の個別最適な学びと学校横断型探究学習に関して指導・助言を行うのは稲垣忠氏が担当。教科等横断的カリキュラムの開発には岡崎エミ氏と牛木力氏。阿部剛志氏には、本校のカリキュラム開発のデータを用いた分析検証結果を基に、評価・研修等に参画していただいた。また、阿部氏のご指導によりロジックモデルを改善した 。

(2)管理機関における事業全体の成果検証、評価のための体制

・管理機関は、本事業を実施していくうえで指導・助言を行う専門的見識を持ち、本校の教育実践に精通している合計4名の専門家から構成される運営指導委員会を設置した。そのうえで、管理機関は、定期的に運営指導委員会を開催した。運営指導委員会は、実施主体である本校の取組の実施・進捗状況を把握するとともに、取組の適切な実施と継続的な改善に資するよう個々の取組や本事業全体及び、事業の成果検証・評価に対し必要な指導・助言した。

【実施体制図】



コンソーシアムの構成員

所属	氏名	主な実績
小国町役場	佐藤　友春	学校運営協議会委員
山形県立小国高等学校PTA	井上　賢和	学校運営協議会委員
山形県立小国高等学校後援会	伊藤　明芳	学校運営協議会委員
山形県立小国高等学校同窓会	渡部　素子	学校運営協議会委員
小国町立小国中学校校長	横澤　聡一	学校運営協議会委員
東北芸術工科大学	森　一貴	学校運営協議会委員
株式会社いきいき街づくり公社	舟山　康名	学校運営協議会委員
旬彩工房	山口　ひとみ	学校運営協議会委員
民宿の越後屋	本間　義人	学校運営協議会委員
桜川酒造株式会社	村上　友梨	学校運営協議会委員
日本重化学工業株式会社小国事業所	髙橋　史記	学校運営協議会委員
ペレットマン	高橋　安以子	学校運営協議会委員
オプトタカハシ代表	髙橋　泰弘	学校運営協議会委員
山形県立米沢女子短期大学	西川　友子	学校運営協議会委員

7　本校における事業の運営

(1)運営実務者会議の体制

本事業を校内で推進する主体を運営実務者会議とし、管理職の下、教科等横断的な取組を行うための事業進捗確認と検証、情報共有、調整、検討の場とした。事務的側面については、事務長へも報告し、必要な協議を行った。運営実務者会議で検討・決定した事項については、随時全職員と共有するとともに、定例職員会議(全職員で構成、月1回開催)で周知した。

「白い森未来探究学」(総合的な探究の時間)の主担当者は、カリキュラム開発等専門家との十分な連携の下、教科等横断的な取組を行うために教科主任の役割分担や進捗状況等を統括した。

教科主任は各教科を担当するとともに、小規模校による教員数の制限を克服する観点から、自身の担当教科以外も支援し、教務主任とも情報共有しながら校内の教員の総力で教育課程を実施した。なお、教育課程を実施する上での課題や要望等については、コーディネーターを通じて町担当部局や産業界、連携先等の各関係各所に共有され、所要の支援が本校に提供された。

(2)カリキュラム開発等専門家及びコーディネーターの校内における役割

カリキュラム開発等専門家及びコーディネーターには下記の2名を配置した。カリキュラム開発等専門家は、教務主任・白い森未来探究学主担当と連携しながら、白い森未来探究学(総合的な探究の時間)やそれ以外の教科が実践的で教科等横断的な取組となるよう、企画立案・運営を行った。

コーディネーターは、カリキュラム開発等専門家や教務主任・進路指導主事の求めに応じ、ワンストップで地域内外の関係各所・各担当者との連絡・調整を行う役割を果たした。なお、コーディネーターとして小国町高校魅力化コーディネーターでもある片岡隆史氏も本事業に協力していただき円滑な運営にご尽力いただいた。

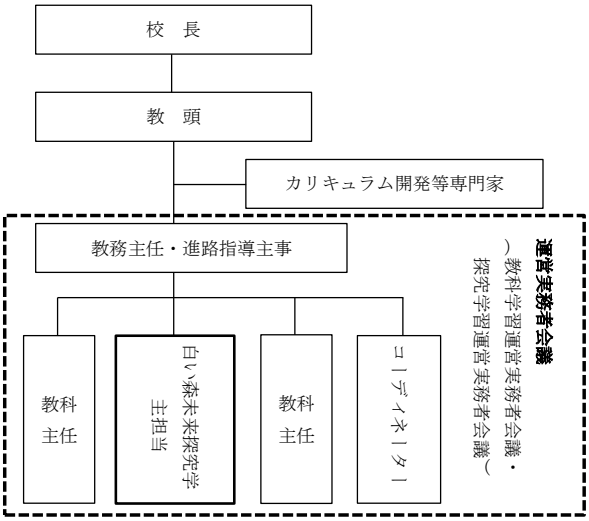
【カリキュラム開発等専門家】

岡崎エミ氏((一財)地域・教育魅力化プラットフォーム研究開発員)

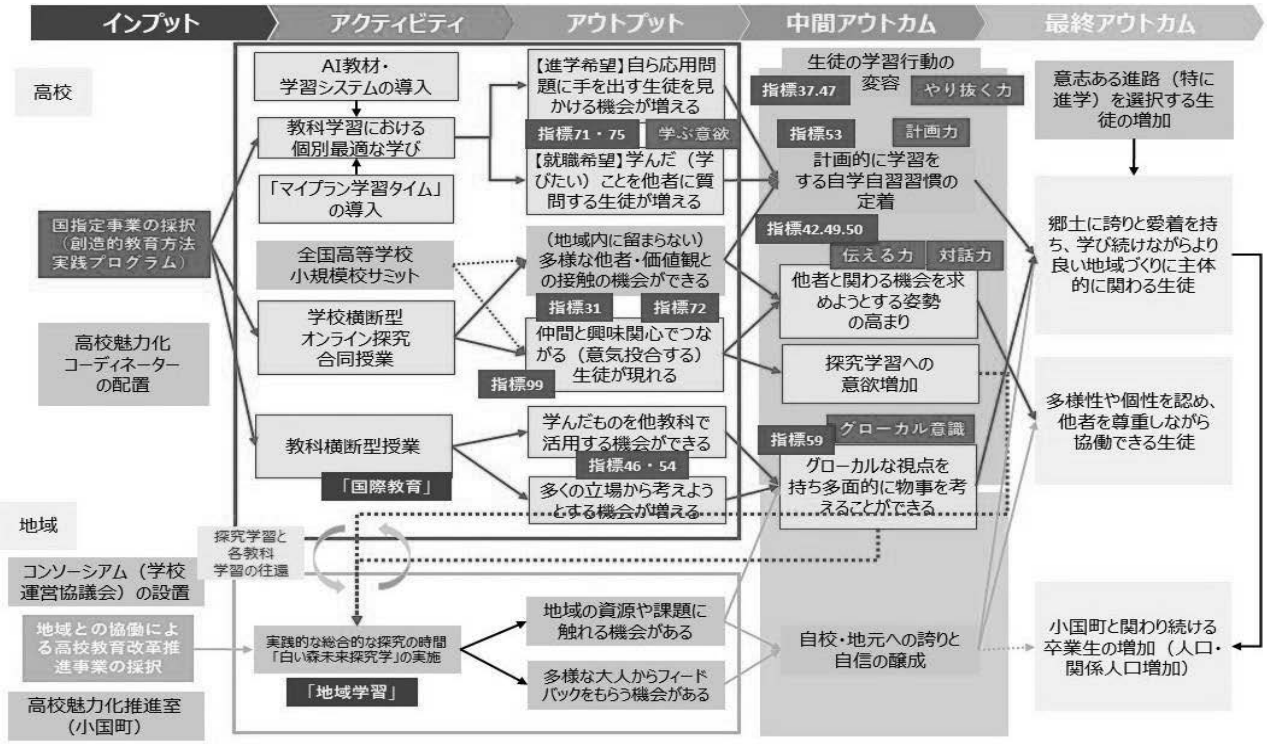
【コーディネーター】

本事業コーディネーター:渡部美聡氏

＜校内における事業の管理体制＞



＜本事業におけるロジックモデル＞



＜本事業に係る指標一覧（高校魅力化評価システムのアンケートに対応）＞

ロジックモデルに記載している指標	アンケートの質問内容
31：探究性に関わる学習環境	お互いに問いかけあう機会がある
37：主体性に関わる自己認識【やり抜く力】	うまくいくか分からないことにも意欲的に取り組む
42：協働性に関わる自己認識【対話力】	相手の意見を丁寧に聞くことができる
46：探究性に関わる自己認識	勉強したものを実際に応用してみる
47：社会性に関わる学習環境【やり抜く力】	忍耐強く物事に取り組むことができる
49：協働性に関わる自己認識【伝える力】	自分の考えをはっきり相手に伝えることができる
50：協働性に関わる自己認識【伝える力】	友達の前で自分の意見を発表することは得意だ
53：主体性に関わる自己認識【計画力】	自分で計画を立てて活動することができる
54：探究性に関わる自己認識【思考力】	一つ二つの立場だけでなく、できるだけ多くの立場から考えようとする
59：社会性に関わる自己認識【グローカル意識】	地域で起きている課題と世界で起きている課題は、お互いに関連しあっていると感じる
71：主体性に関わる行動【行動力】	授業で分からないことについて、自分から質問したり、分かる人に聞きにいったりした
72：協働性に関わる行動	自分の考えについて、様々な人に意見やアドバイスを求めた
75：探究性に関わる行動【行動力】	授業の内容について、「なぜそうなるのか」と疑問を持って、自分で考えたり調べたりした
99：独自設定質問	多様な同年代と関わることで、視野が広がり考えが深まった

※【　】内は、本校で定めた育成したい資質・能力の柱「主体性」「挑戦心」「協働力」（3つのおぐパワ）に紐づく「20の育てたい資質・能力」についての位置づけ

8　本校における取組

(1)カリキュラム開発に係る概要

○教科学習における理解力と習熟度に応じた個別最適な学びと単元配列表を活用した教科等横断型授業の実現

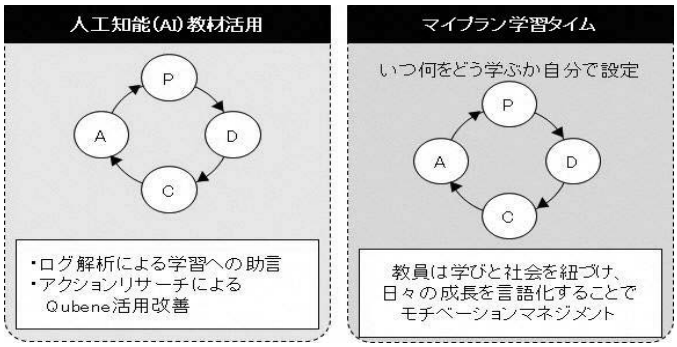
・1年生に対し、義務教育段階の5教科学習内容の学び直しや高等学校段階の学習内容への円滑な移行を目的に、人工知能(AI)教材「Qubena(キュビナ)」を導入し、生徒一人ひとりに理解力と習熟度に応じた個別最適化された学習を提供した。

・2、3年生には学習習熟度の差が大きい高校数学の Qureous(R6 は後継教材 tokuMo)を導入した。

・教員は、操作ログや計算過程、回答データを分析し、生徒のつまずきを把握し、助言。アクション・リサーチにより、活用方法の継続改善・充実を図った。

・各授業内や単元内において自分の学習を計画する「マイプラン学習タイム」を設定。家庭学習でもモチベーション・マネジメントを行いながら学習のマイプラン作成を促し、自律的な学習者の育成を図った。

・各教科で作成する年間指導計画に基づく単元配列表を活用し、各教科担当教員の協働による教科等横断型授業を推進し、目指す資質・能力の効果的な育成を図った。

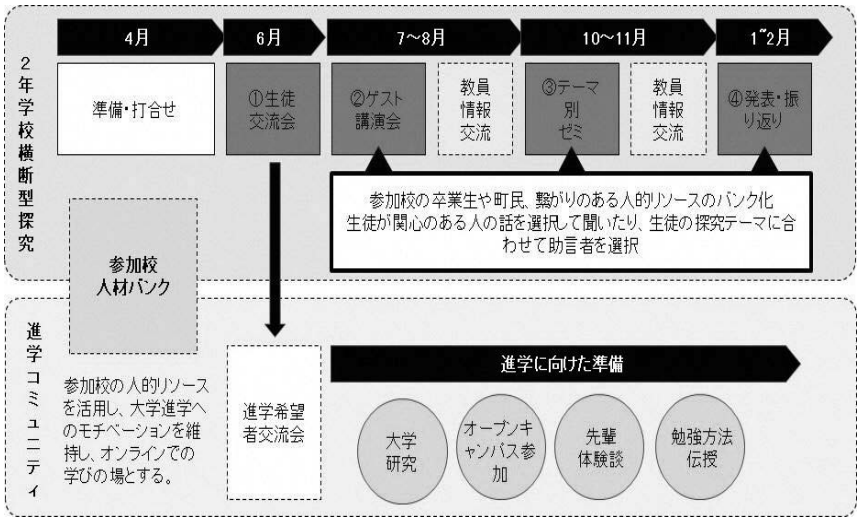


○小規模校学校連携型探究学習による教科等横断的な学びの個別最適化

遠隔地の小規模校(申請校、岩手県大槌高等学校及び熊本県小国高等学校)がそれぞれの人的リソースを共有し、探究学習の個別最適化を目指す新しい教育方法を実現した。

・同じようなテーマに興味・関心を持つ生徒同士が Zoom を用いたオンライン上で交流やテーマに関する情報交換を行い各教科の学習を意識しながら探究学習を深めた。

・テーマの専門家を提供し、探究学習の推進と深化を促し、教科等横断的な学びの個別最適化を図った。



○オンラインコミュニティ構築による進学希望者のモチベーション喚起と進路実現

小規模校の進学希望者による「進学希望者コミュニティ」を構築し、情報交換をとおして学びへの動機を喚起した。

(2)関係機関等との連携・協力体制の構築の考え方・方法

○小国町や小国町教育委員会との連携

2019 年度指定文部科学省「地域との協働による高等学校教育改革推進事業(地域魅力化型)」では、小国町長が管理機関の代表となり、本校と共に事業を推進してきた。2021 年度からは、町教育委員会内に高校魅力化推進室が組織され、課長補佐級以下5名の職員体制で県外地域留学生関連業務や探究活動を含む教育活動全般について常に連携しており、連携・協力体制は万全である。

○県外小規模校横断型探究学習のための関係機関との連携

岩手県立大槌高等学校及び熊本県立小国高等学校とは、2020 年度から3年間にわたってオンライン交流や探究学習の取組を行ってきた。また、本校は 2018 年度から「全国高等学校小規模校サミット」主催事務局校として他の県内外の小規模校との交流や協働の実績があるので、連携の発展性もある。

○連携協力を担うコーディネーター

本事業のコーディネーターが取り組む内容は、探究活動に関する関係機関との事前調整やオンライン活動の準備、情報発信等の業務を担う。2022 年度からは町のコーディネーターとは別に、本事業のコーディネーターを新たに配置している。

9 実施内容

(1)取組内容

・令和6年度は下記に力点を置いた計画に沿って「カリキュラム開発」と「関係機関等との連携・協力体制の更なる構築強化」に取り組み、指定終了後も継続して取り組めるように進めた。

①AI 教材の導入による教科学習の個別最適化

・義務教育段階や高等学校の学習内容の定着、学習意欲の喚起、基礎学力の伸長による探究学習への波及、授業と家庭学習の連動による自律的学習者育成を推進する。

②教科横断的な学びの推進

・運営指導委員の助言等をもとに、教員間で連携した教科等横断的な学びを推進する。
オンライン・オフラインを駆使した教科等横断的な探究学習を、外部人材を活用しながら学習に必要な研修とともに個別最適化を進める。その際、常に各教科学習との往還へ気づきを促す。

③オンラインコミュニティの構築と進学希望者の学びの動機喚起

④成果と課題の検証と他校・他地域への発信

・運営指導委員による授業参観や学習ログ等の分析、また、各種検証に基づく進捗状況の定期的な確認と成果検証を行い、成果を発信する。

(2)令和6年度(3年次)の計画

月	事業の内容	
	カリキュラムの開発	関係機関等との連携協力体制の構築
4月	白い森人研修①(グランドデザイン研修) 運営実務者会議	高校魅力化実務者会議(町・学校) 保小中高一貫教育推進部会
5月	白い森人研修②(伴走研修) 1年地域フィールドワーク 2・3年探究を語る会	高校魅力化実務者会議(町・学校) 保小中高一貫教育推進協議会 学校運営協議会・コンソーシアム会議

6月	1年地域フィールドワーク 2年学校横断型探究学習 全国高等学校小規模校サミットプレセッション	高校魅力化実務者会議（町・学校） 学校横断型探究学習打合せ 町合同学校運営協議会
7月	サミット参加校事前オンライン研修 1学期振り返りワークショップ 全国高等学校小規模校サミット	高校魅力化実務者会議（町・学校） サミット参加校事前オンライン打合せ
8月	白い森人研修③（振り返り）	高校魅力化実務者会議（町・学校）
9月	1年地域フィールドワーク	高校魅力化実務者会議（町・学校）
10月	中間総括会議 2年探究トークフォークダンス 1年町課題解決ミニプロジェクト 2年学校横断型探究学習（中間発表） 1年ハタラトーク！！若手社員と語る会	高校魅力化実務者会議（町・学校） 学校横断型探究学習打合せ 保小中高一貫教育事務局会 保小中高一貫教育推進協議会 学校運営協議会・コンソーシアム会議 町合同学校運営協議会
11月	2年研修旅行 運営実務者会議 第2回運営指導委員会（指導・助言）	高校魅力化実務者会議（町・学校） 学校運営協議会・コンソーシアム会議
12月	白い森人研修④ 町教育フォーラム（学習発表） 2年学校横断型探究学習 1年探究学習成果発表会 学校祭（学習発表） 2学期振り返りワークショップ	高校魅力化実務者会議（町・学校） 学校横断型探究学習打合せ
1月	年間総括会議 3年探究学習成果発表会	高校魅力化実務者会議（町・学校） 保小中高一貫教育推進部会
2月	マイプロジェクト山形県サミット 2年探究学習成果発表会 2年学校横断型探究学習（まとめ） 運営実務者会議 第3回運営指導委員会（成果検証）	高校魅力化実務者会議（町・学校） 保小中高一貫教育事務局会 保小中高一貫教育推進協議会 学校横断型探究学習打合せ 学校運営協議会・コンソーシアム会議
3月	事業成果報告	高校魅力化実務者会議（町・学校）

※白い森：小国町を象徴するブナの木肌と雪の「白」から町全体を「白い森」と表現

10　成果の普及のための取組

下記の方法により他校・他地域への成果の普及を行う。また、他校等から取組について照会があれば、情報提供を丁寧に行う。

(1) 実践報告会及び公開授業の実施（令和6年 11 月）

・令和4年度から3年間取り組んできた本事業の成果を普及するために、実践報告会と公開授授業を実施した。

・公開授業は、ビジネス基礎と国語表現の教科横断型授業として行った。その概要は次のとおりである。

○　単元名「増加している訪日外国人観光客に私たちはどう向き合っていくべきか？」

国語表現：外国人観光客の増加に関する記事をネットや新聞を用いて収集し、それを根拠に「外国人観光客の増加のメリット／デメリット」や「二重価格を設定するべきか」について自分の考えをまとめる。	２科目の学びを踏まえてディスカッションを行う。
・ビジネス基礎：観光をマーケティングの視点で考え、二重価格設定について詳しい知識を得る。また、外国人観光客に関する具体的な数値を調査し、現状を理解する。	

・実践報告会では、取組内容の説明と事業のロジックモデルにおけるアウトカムの状況報告を行った。

（2）小国町教育フォーラムでの生徒による成果発表（令和6年12月）

小国町立小国小学校アリーナにて、「白い森おぐに教育フォーラム 2024」が開催され、小国高校生12 名が発表、2名が司会を行った。発表は「白い森未来探究学（1年生・3年生）」、「アメリカ短期留学（2年生）」「台湾研修旅行（2年生）」「地域みらい留学生（県外生）」「全国高等学校小規模校サミット」の5つについて、地域住民及び学校運営協議会委員に対し報告を行った。

（3）SNSやメディアでの情報発信

本事業の取組を実践するごとに公式SNSで、生徒の様子を中心に発信した。また、月に1度程度公式ホームページに1か月のトピックを掲載し、実施校の魅力ある取組として普及に努めた。また、特色ある授業や行事があるたびに、新聞社及びテレビ局へプレスリリースしたり、教育専門誌等に寄稿したりすることで、成果の普及を図った。

（4）成果報告書による普及

年度末に事業の取組をまとめた成果報告書を作成し、同事業の指定を受けている学校等や事業連携先高等学校、全国高等学校小規模校サミット参加校等に提供した。また、他校等からの実施校へ訪問受け入れの機会があれば、取組と成果を発信し、普及に努めた。

※令和6年度は、三菱みらい育成財団、宮城県、新潟県、茨城県、宮崎県、山形県議会等から実施校に学校訪問・視察があった。

11　国の指定終了後の取組継続のための仕組みづくり

（1）教育課程への実装

・AI教材については、令和7年度に小国町予算でリクルート社のスタディサプリを全校生の一人1台端末へ導入することとなっているため、活用方法について継続して研究を進めていく。

・教科横断型授業については、令和7年度以降も各教科のシラバスに年間を見通した計画として位置づけ、全教職員の協働体制のもと継続実施していく。また、白い森人研修を通して教員の授業力向上の一環として授業のブラッシュアップを図っていく。

・学校横断オンライン探究学習については、令和7年度も認定NPO法人カタリバと連携して実施していく予定である。また、実施校は、全国高等学校小規模校サミットを今後も毎年開催することとしており、全国の多くの小規模校との交流は継続するので、取組について全国各地の小規模校を対象

に連携について協議することが可能と考える。

(2) 県からの指導助言

・取組の継続に当たり、実施校が専門的な指導・助言を必要とする際は、県教育委員会の担当指導主事が対応し、取組を支援する体制が整っている。

(3) 予算面・人員配置面での取組継続

・町との協働

指定終了後も実施校は、町や町教育委員会と協働しながら取組を発展継続させることとなる。平成13 年度から6年間、連携型中高一貫教育の文部科学省研究開発学校の指定を受け、それが終了した後、町と共に小中高一貫教育(平成 30 年度からは保育園を加えた保小中高一貫教育へ発展)へと発展継続させた実績がある。現在、保小中高一貫教育推進協議会より予算面でも支援を受けているため、事業継続が可能である。実施校は、令和6年6月に小国町及び東北芸術工科大学との3者による連携協定を締結しており、小国町で雇用しているコーディネーターの協力を得て取組を続けることとしている。

・「小国高校を支援する会」との協働

必要となる費用については、現在も実施校に対し力強い支援を行っている「小国高校を支援する会」等と実施校が相談しながら検討する。

・一般財団法人三菱みらい育成財団助成

令和6年度から3年間、一般財団法人三菱みらい育成財団から助成を受けている。

第２部
事業の詳細

1.AI教材の導入による教科学習の個別最適化
2.教科横断的な学びの推進
3.オンラインコミュニティの構築と進学希望者の学びの動機喚起
4.教職員研修

１．ＡＩ教材の導入による教科学習の個別最適化

【令和６年度（３年次）の概要】

令和５年度末の生徒の様子から、「どうせできないと諦めてしまう」「学び方を知らない（何から手をつけていいか分からない）」「他の人（先生・仲間）に聞くことに抵抗がある」等の学ぶ意欲の低下と、大学進学希望の生徒が「授業に物足りなさを感じても自ら学びを求めない」、「進路達成に向けて何をすべきか分からない」「学ぶのが楽しいという姿勢が足りない」という課題が見て取れた。また、全体的に目標や計画を立てて学習を進めることが苦手であるため、ＡＩ教材導入やマイプラン学習等の個別最適な学びを推進することが生徒の学習意欲と主体性を向上させることにつながると考えた。

ＡＩ教材として１年生にQubena（中学校以前の５教科）、２年生及び３年生の進学系授業の選択者にtokuMo（高等学校学習範囲の英語・数学・国語・理科・歴史・公民・情報の７教科）を一人一台端末のChromebookにインストールし使用した。Qubenaは中学校以前の５教科の内容のため、中学校までの学習内容の学び直しによる高校学習内容への円滑な移行が可能であり、tokuMoは高校における学習内容なので、高校の学習内容の習熟が期待できる。学習意欲の一層の喚起に加え、特に３年生の進学希望者に対しては、大学受験並びに大学進学後でも通用する基礎的な学力の定着を期待して導入した。

今年度は、「初めからあきらめることなく、人に聞いたりできることに取り組んだりできる」「自分の興味・関心に応じて、見通しを立てて主体的に学習を進めることができる」をねらいとし、教員が問題を選びワークブックとして課題配信するという授業内や長期課題としての使用に加え、生徒が教科と分野を指定して自由に進めることができる機能に着目し、自学自習や自分で学習内容を計画して自律的に学習を進めるマイプラン学習に重点を置いた。授業外での使用頻度を高めるために朝学習やホームルームの時間等の学年で使える時間での利用を、その学年の実態に応じて促した。

実践例１）数学Ⅰ授業（マイプラン学習（単元内自由進度学習））のやり方をブラッシュアップ

「学習の手引き」の学習内容を小単元ごとに記載するようにして、生徒がどこをやればいいのか分かりやすくした。また、学習方法の選択肢として、①教員の説明を聞きながら学習する、②級友と教え合いながら学習を進める、③一人で自分のペースで学習を進める、の３つを提示し、生徒が自分に合った学習スタイルで理解を深めることとした。学習教室も３箇所準備し、学習方法別に場所を分けた。

［生徒の声］

①を選択した生徒：「（教員の説明だけでなく）友達に教えてもらいながら理解して答えることができました」「残りの問題を解いてから友達に教えてあげることができた」

②を選択した生徒：「問題を教科書とかを見ながら頑張りました」「自分で『こういうことなんだな』と理解できるように頑張りました」

③を選択した生徒：「ノートに書いて復習した。全体的に合っている問題が多かったので良かった」「練習問題でやったことが（プリントの）注意で書いているところを見て理解することができ、問題の解き方が分かった」

マイプラン学習　数学Ⅰ　学習のてびき　（単元：３章２節）

１年１組 ＿＿＿ 番　氏名 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

学習内容	プリント	教科書(参考)	WRITE	スタサプ ベーシック レベルⅠ	Qubena
⓪中学校の復習	－	－	－	（中３ ２次方程式）	中３ ２次方程式
①２次関数のグラフとｘ軸の共有点	p1~3	p108~112	p57~59	第９項 ２次方程式	中３ ２次方程式
②２次関数のグラフとｘ軸の共有点の個数	p4~7	p113~117	p60~62		
③２次不等式１	p8~9	p118~120	p63~64	第１０講 ２次不等式	－
④２次不等式２	p10~11	p121~123	p65~66		
⑤連立不等式	p12~13	p124~125	p67~68		

実践例２）朝学習の持ち方を工夫

自学自習の習慣化のため学年ごとにやり方を検討して朝学習に取り組む。

１学年：毎日朝読書

２学年：月水は朝読書。それ以外はＩＣＴ教材または紙媒体での取組リストを月ごとに提示。
マイプラン朝学習スケジュールに記入しながら進めた。

３学年：各自のやるべきこととその目的・目標を週単位で記入しながら進めた。

【令和６年度の取組における成果】

ＡＩ教材は、Qubenaは長期休業課題や自主学習、単元初めのレディネスチェックとして、tokuMoは配信課題・授業内容の復習問題・定期テスト対応の自主学習として生徒に合わせての活用を促したところ、特にQubenaは、中学校段階での基礎的知識に不安があると感じている生徒にとっての取り組み課題として有効であり、生徒の学習意欲を想起する一助となった。数学の他には、１年生の理科においても、高校での学習を進めるにあたり中学校での既習事項をQubenaの出題範囲として示すことで学習の深まりが期待できた。

ＡＩ教材活用において、重点的に取り組んだ教科は数学である。数学Ⅰにおいてマイプラン学習を導入し、学習方法を毎時間選択したことで、生徒が自分に合った学習スタイルで理解を深めることにつながり、その結果、数学への動機づけの度合いが、上位層・中位層・下位層それぞれで高まっていることが分かった。単元の内容に興味をもち自主学習に取り組んだり、学習のやるべきことをきちんと理解したり、わからない問題も最後までやろうとしたりする生徒が増加しており、生徒の学習意欲の向上が図られていることが確認された。

また、数学Ⅰにおけるマイプラン学習の導入は、生徒が自分に合った学習スタイルを選択できる環境を提供し、学ぶ意欲の向上に貢献していると考えられる。

この他に本校では、各教科で授業評価アンケートを１学期末（全学年対象）と学年末（第１・２学年対象）の２回実施している。国語、地理歴史、公民、数学、理科、英語におけるアンケートには、「ＡＩ教材を使った授業を通して、【学ぶ意欲】、【計画力】、【やり抜く力】の資質・能力はどのように変化しましたか」という質問項目を設けている。そこで、学校全体での学習意欲の喚起・向上を俯瞰的に捉えるため、１～３年生すべてのデータを含む１学期末の授業評価アンケートにおける全科目の回答数を合算し各項目の割合を求め、成果とみなすこととした（次表）。なお、比較するために、令和５年度の学年末に行った授業評価アンケート（第１・２学年対象）の結果も記載している。

「学ぶ意欲」については昨年度と大きな変化は見られないが、「単元内容に興味をもち、自主学習を行った」と回答している生徒が若干増えている。「計画力」については、「学習のやるべきことがわからないままだった」生徒が全教科あわせてもいなくなり、「学習のやるべきことがわかった」生徒が増加していた。「やり抜く力」については、「わからない問題も最後までやろうとした」生徒の割合が大幅に増加していたが、「わからないところがあっても諦めずに最後までやり遂げた」と回答する生徒が０％であり激減していた。

これらのことは、ＡＩ教材が提供する個別最適化された学習環境は、生徒の知的好奇心を刺激し学習への積極性を高めるという点では有効であるが、解けない問題に関しては類題が次々と出題されるため、生徒にとってはあきらめずにやり遂げるという達成感にはつながりにくいという課題が生じているようにも受け止められる。これは、ＡＩ教材は系統だった学習に向いていないという教材の特性に依るものであり、その特性を授業担当者が理解しておく必要があることを示しているのではないだろうか。

ＡＩ教材の効果を最大限に引き出すためには、生徒一人ひとりの学習状況を把握し、きめ細やかな指導を行う必要がある。また、数学以外の教科におけるマイプラン学習の実施について、教員研修が十分ではなかったことも踏まえ、教科との相性も考えて展開していきたい。

「学ぶ意欲」	R6	(参考)R5
やる気が下がった	3%	3%
授業において指示されたことを行った	56%	54%
積極的に問題を解いた	27%	32%
授業以外の時間にも自主学習を行った	6%	8%
単元内容に興味をもち、自主学習を行った	7%	3%

「計画力」	R6	(参考)R5
学習のやるべきことがわからないままだった	0%	4%
学習のやるべきことがわかった	71%	63%
学習にどれくらい時間が必要か予測できた	18%	19%
予測を基に学習の計画を立てた	4%	7%
学習計画を実行に移した	7%	7%

「やり抜く力」	R6	(参考)R5
学習をやろうとしなかった	8%	3%
わからない問題をそのままにした	5%	7%
わからない問題も最後までやろうとした	73%	56%
わからないところがあっても諦めずに最後までやり遂げた	0%	15%
できないところ、わからないところを繰り返し取り組んだ	15%	19%

＊R5：対象１・２年生（５教科授業評価アンケート、述べ３７３回答）、令和６年２月実施

＊R6：対象１～３年生（５教科授業評価アンケート、述べ４１３回答）、令和６年７月実施

【令和６年度の取組における課題】

ＡＩ教材を活用した取組が数学を主としたものであり、学校としての体系化には至らなかった。生徒個々の学習特性として、紙に印刷した学習プリントの方が取り組みやすい生徒、教員の説明を聞きながら理解した方が学びやすいと感じる生徒が一定数いるため、授業内でＡＩ教材を全員が活用することが出来なかった。しかし、ＡＩ教材は生徒にとって使いやすい教材の一つであり、生徒の学習特性に応じた個別最適な学びを推進する新たな学習ツールであると感じた。

２．教科等横断的な学びの推進

【令和６年度の取組の概要】

令和５年度の実践をもとに行った職員研修会の中で、令和６年度は次のようなねらいと方法で、全教員が学期に１回以上教科横断型授業を行うこととした。

［ねらい］

教科の枠にとらわれない魅力的な本校独自の授業実践について研究する

- 各教科の特色を活かしながら、教科横断的視点を持たせることで生徒の資質・能力の向上を図る。
- 教科の枠を超えた授業に触れ、各教科への興味・関心を向上させて、学習の動機付けにつなげる。

［実践方法］

① 地歴・公民、家庭（軸となる教科）の年間の授業計画の中で、専門的な説明を要する分野について、他教科の教員を招聘して詳しい説明を行う。

② 時事的な内容をテーマに据えて複数教科でチームを組み、それぞれの教科の視点で授業を行う。

③ 各授業担当者がニーズに合わせて自由に他教科の教員またはその他の職員とチームを組み合同で授業を行う。

④ 前年度に行った教科横断授業と同じものをブラッシュアップし、前年とは別のクラスで行う。

［実践した授業事例］

事例１）文学国語と数学Ａの教科横断型授業「論理的とは何か」

<table>
<tr><td>＜文学国語＞
三段論法という型を使って、どんな思考法なのか、それはどんなときに必要か、成り立たないパターンは何かを考える。</td><td rowspan="2">言葉自体は聞いたことがあっても、具体的に言語化できない「論理」。三段論法をどう活かすかを考える。</td></tr>
<tr><td>＜数学Ａ＞
集合と論証の分野で勉強したベン図を活用して命題の真偽を可視化する。</td></tr>
<tr><td colspan="2">＜生徒の感想や担当教員の見取り＞
生徒１）
授業前：論理的とは「作成者の考えに沿って答えを出していく」とワークシートに書いていた。
授業後：振り返りでは「大前提がおかしいと小前提まで崩れる、大前提は大きくなければ論理的にならないなとおもいました。」と述べており、根拠自体だけでなくその関連も正しくなければ論理的にはならないことに気づいていた。
生徒２）
授業前：論理的とは「感情的にならない」とワークシートに書いていた。
授業後：振り返りでは、論理的とは「物事を自分の主観ではなく大まかなことから簡単に説明すること」だと述べており、論理の具体的な表し方や基本的な考え方を理解できていた。
生徒３）
授業前：論理的とは「感情的ではない。誰かに言葉だけで説明するときに必要」とワークシートに書いていた。
授業後：振り返りでは「大前提をもとに結論を考えて話すことだと思った。矛盾が起きないように話していくことだとわかりました。」と述べている。論理の基本的な考え方や、それが使われるのは限られた場面ではないということを、教科横断の授業を通して身に着けていた。
＜授業者の感想、授業における工夫、学習の成果、今後への課題＞
１時間の国語数学合同授業の中では、時間が短く内容が伝わったかどうか心配だったが、正しい三段論</td></tr>
</table>

法を作る時間には、しっかり考え様々なアイデアを出してくれた。ひとりではなかなか理解やアイデアが出ない生徒も、グループで共有しながら全員が三段論法を作った。後日数学単独での補足の授業を行い、理解が深まった。

生徒が１つの題材を２つの教科の特性から理解できるよう意識した。生徒に例を示しながら「どこかおかしいところはないか？」「なぜおかしくなってしまっているのか？」という問いかけをしたことでアイデア出しがスムーズにいった生徒が多かったように感じる。結論が正しいか、３つの文の関係は正しいかということだけでなく、そもそもの前提が正しいのかを吟味する時間を設けると、より理解が深まったのではないかと思う。

事例２）政治経済とビジネス基礎の教科横断型授業「目指せ、株価マスター！」

＜政治経済＞ 各グループで行っている株式学習の本日時点での株価を確認し、損失と利益の推移を確認する。	株価はなぜ変動するのかを考え、２学期以降の株式学習に生かし、株価マスターを目指す。
＜ビジネス基礎＞ 株価が変動する原因は？株を買うには何を参考にしたらいいの？	

＜生徒の感想や担当教員の見取り＞

生徒１）

授業前：知識がまったくなく、投資する会社を名前で選んだ。

授業後：ニュースや時事の話題に耳を傾けようと思った。考えて投資したい。

生徒２）

授業前：好きな会社を選んだ。株価が上がりそうという直感で選んだ。

授業後：日本や世界の情勢に興味を持つ必要を感じた。会社の状況を分析できるようになりたい。

生徒３）

授業前：半導体が伸びると予想して選んだ。

授業後：世の中の需要を見て投資するようにしたいと思った。情報収集が大事だと思った。

＜授業者の感想、授業における工夫、学習の成果、今後への課題＞

株と聞くと「難しい」や「自分とは関係ない」などのイメージがあったが、日々の株価の変動は自分たちの生活と大きく関わっているということを理解してもらえるように授業を進めた。株価というのは社会的な見方だけでなく、商業的な見方も重要であり、生徒が多面的・多角的に物事を捉えることができるよう授業を展開した。生徒が卒業した後も、世の中の動きに常にアンテナを張り、様々な情報を主体的に習得できるような力を伸ばしていきたい。

財務諸表の分析には専門的な知識が必要だが、まったく学習をしていない生徒もいるので、図解を中心に授業を進めた。とくに総資本利益率は、株主からの資金を使ってどのくらい利益を稼いだのかを表す指標で、株価と密接な関係にあることを丁寧に説明した。様々な場面で金融教育が求められており、財務諸表などの数値を把握し分析する力を伸ばしていきたい。

事例３）体育と物理基礎の教科横断型授業「50m走分析　自己ベスト更新を目指す」

＜体育＞ 50m走タイム測定　　●再測定前に解析データをもとに助言 再度50m走実施→測定データ解析→課題/考察→発表→●再測定	科学的な視点を持つことにより、自己の身体能力の向上を体感する。
＜物理基礎＞ ①加速度運動を理解する。 ②科学的な視点を持つことにより、自己の能力を向上させることができるようになる。	

＜生徒の感想や担当教員の見取り＞

生徒１）

授業前：走っている途中に減速している区間がある。

授業後：頭が固定されていないから、しっかり前を向いて走る。

生徒２）

授業前：最後まで走りきれていない。足の力の方向が前ではなく、地面と垂直になっていて推進力を殺している。

腕を全然振っていない。足の回転速度が遅い。
　授業後：最後のほうが失速しているので最後までしっかり走り切る。動画をみたら推進力が前ではなく上に行っていたので、前を意識して走る。スタートダッシュのときや走っている途中に、一番力が出せる体勢や足の出し方などを研究する。
生徒３）
　授業前：足音がでかい。同じ場所を見ていない。30m地点で遅くなっている。前傾姿勢じゃない。バネの力が無い。50m付近でかなり減速している。肩に力が入っている。全体的に力が入りすぎている。
　授業後：足音を大きくしないように注意する。同じ場所を見る。前傾姿勢を意識する。腕の振りは左右にブレない（ハの字にならない）ように前後を意識する。走行時の腕は自分の視界に入るか入らないくらいを意識して振り上げる。無駄な力を入れない。腿を上げる。
＜授業者の感想、授業における工夫、学習の成果、今後への課題＞
　授業前は生徒全員が何も考えずに走っていた。区間毎の速度とフォームを分析することにより、課題と改善方法を考察することができた。科学的な視点を持つことにより、自己の能力を向上できることを認識できた。夏季休業直前に再測定する予定であったが、梅雨のためグラウンドコンディションが悪く、実施できなかったことが残念である。

事例４）授業研究会（令和６年９月５日(木)）における教科横断型授業（公開授業）

本事業の取組について、保護者や近隣小中学校教員、地域住民の理解を促進し、また、事例紹介によって本事業による効果を普及するため、公開授業及び授業研究会を開催した。

２校時、３校時は全学年で、ＡＩ教材を活用した個別最適な学びを中心にした授業を公開した。４校時は３年１組の地理探究を研究授業として公開した。研究授業の単元名は「発展途上国の都市問題　～ルサカのコンパウンドではなぜコレラがまん延するのか～」であり、養護教諭による公衆衛生学を含む教科横断型授業としての単元であり、４時間配当のうち第３時を公開した。

第 1 時	○発展途上国の居住・都市問題	・発展途上の国々で感染症が流行ってしまっている。ではなぜ感染が拡大してしまうのか。実際に現地の様子はどうなのか。この疑問を実際にザンビアに行ってきた先生と考えてみる。 ・ルサカのコンパウンドの現状について理解を深める。
第 2 時	○世界で流行する感染症 （養護教諭より）	・コレラなど発展途上国で蔓延する感染症について理解を深める
第 3 時	（研究授業） ○ルサカのコンパウンドではなぜ感染症が蔓延するのか	・第１時と第２時で学習した知識を用いて、コレラが蔓延する原因を考える。
第 4 時	○感染症の蔓延を防ぐために ○まとめ	・日本との相違点、共通点を考える。 ・防ぐためにはどんなことが必要かを考える。

授業研究の成果としては、保護者及び近隣小中学校から15名程度の参加があり、本事業の取組について理解を得ることができた。また、研究授業を実施校の全教員が参観し、事後研究会を行うことで、校内で事例をもとにした目線合わせができた。単元の最初、生徒はコレラという言葉は聞いたことがあってもどのような感染症か想像できなかったようである。養護教諭から、公衆衛生学としてコレラ予防を習うことでイメージを持つことができ、その後の授業への取組の真剣さが増していた。そのような生徒が学びに集中していく様を教員が目の当たりにすることで、各教員が教科横断型授業を実践していくにあたり創意工夫を凝らしていく動機づけとなったと考える。また、教科書にはザンビアの衛生事情については掲載されていないが、本単元は担当教員が実際に現地へ赴いた経験をもとに教材化を図ったものであり、教員の指導力向上という点でも有効に機能したと言える。

［令和６年度（３年次）の教科横断型授業の実践一覧］

学年	授業方法	科目	氏名	テーマ等	紹介文	実施月日
3年	①軸となる教科	生活と福祉	加藤真央	健康の社会的決定要因	健康の社会的決定要因について、テーマごとに分かれグループ学習を行った。その際、他教科の視点を取り入れるため、他教科の先生から多様なアドバイスをいただき、学びを深めた。	5月16日(木)
2年	③ニーズでチーム	体育	長岡郁子・橋本陽貴	50m走分析　自己ベスト更新	新体力測定に向けて、体つくり運動の中でダッシュや走りの動きづくりを練習しました。	5月13日(月)
		物理基礎	蝦名恵介		科学的な視点を持つことにより、自己の身体能力の向上を体感する。	5月28日(火)
2年	②時事的なテーマ	ビジネス英語Ⅰ	舟山知美	「新聞を用いての英語ライティング」	日本の新聞記事を読み、感想を英語で書くことで、生徒にとっての教科横断を図りました。日本のニュースについて海外の学校への発信にもつなげます。	6月18日(火)
2年	④前年度のもの	文学国語	五十嵐遥佳	「論理的」とは何か考える	言葉自体は聞いたことがあっても、具体的に言語化できない「論理」。三段論法という型を使って、どんな思考法なのか、それはどんなときに必要か、成り立たないパターンは何かを考えます。	7月16日(火)
		数学Ａ	佐藤喜紀		集合と論証の分野で勉強したベン図を活用して命題の真偽を可視化します。三段論法ではどう活かされるでしょう。	
3年	①軸となる教科	政治経済	髙橋謙介	株価はなぜ変動するのか？	株価が変動する原因は？株を買うには何を参考にしたらいいの？目指せ株価マスター！	7月18日(木)
		ビジネス基礎	松田明子			
2年	①軸となる教科	家庭総合	加藤真央	子どもを保護の対象から、権利の主体へ！～子どもの人権を考える「虐待」～	「虐待」の学習に公共の視点を取り入れ、「寛容の精神」や「非暴力」と関連させながら、理解を深めよう。	6月3日(月)

3年	②時事的なテーマ	地理探究	髙橋謙介		・昆虫食(eating insects）の世界的な広がりと地域における様々な昆虫食の歴史と文化について ・地理探究では、主に世界の昆虫食の広がりについて学ぶ ・英語コミュニケーションⅢでは、主に日本国内（都道府県）の昆虫食の広がりについて学ぶ	7月8日(月)
		英語コミュニケーションⅢ	鈴木武志			
3年	①軸となる教科	フードデザイン	加藤真央	メキシコにルーツがあるＡＬＴのメリッサ先生にメキシコ料理を学び、他国の食文化に触れる。	メキシコにルーツのあるＡＬＴの先生から本場のメキシコ料理を学び、他国の食文化に触れる。そして、英語を交えた調理実習を通して、料理技術だけでなく英語力も鍛えよう。	7月19日(金)
		ビジネス英語Ⅱ	髙橋泰弘、メリッサ			
3年	①軸となる教科	地理探究	髙橋謙介	発展途上国の都市問題～ルサカのコンパウンドではなぜコレラがまん延するのか～	発展途上国の国々で感染症が流行ってしまっている。それは教科書にも載っているからそんな事実は知っている。ではなぜ感染が拡大してしまうのか？実際に現地の様子はどうなのか？この疑問を実際にザンビアに行ってきた先生と考えてみよう！教科書はいらない、自分の目で見て、考えて、今この世界で起きている現状を考えよう！	9月2日(月) ～9月6日 (金) 計4時間
		養護教諭	水口明夏			
３年	①軸となる教科	地理探究	髙橋謙介	東南アジアの経済発展と変化	やっぱり実際に現地に行った人の話の方が楽しいよね？今回は東南アジア代表松田先生です！	10月8日(火) 2校時
		商業	松田明子			
３年	①軸となる教科	地理探究	髙橋謙介	インド	インドといえば数学といわれるのはなぜか？数学の歴史やインドの教育からその秘密を解き明かしてみよう。	10日16日 (水)
		数学	佐藤喜紀			10月18日 (金)
2年	②時事的なテーマ	物理基礎 政治・経済	蝦名恵介	原発0の影響と政党の方針の在り方	原子力発電のしくみと課題を知る。原発0の影響を考慮して、自分の意見を反映させる行動（投	10月8日(火)

					票）を考える。	
3年	③ニーズでチーム	体育	長岡郁子 橋本陽貴	誰もが「楽しめる」「喜ぶ」スポーツをつくろう	地理探究で学んだ世界の祭りやニュースポーツ体験、今までの運動経験を活かし、既存のスポーツの組み合わせやルールの工夫で、誰もが「楽しめる」「喜ぶ」スポーツを考え、クラス皆で実践します。	10～11月
		地理探究	髙橋謙介			通年
3年	②時事的なテーマ	文学国語	佐藤佳代	史記「四面楚歌」	故事成語には歴史ドラマがあり、その言葉には血が通っている。バックボーンを知れば言葉が躍動してきます。	10月15日
1年	③ニーズでチーム	保健	橋本陽貴	精神疾患の特徴・予防・回復	相手の言動や変化に気づく実践的な学習	10月2日
		養護教諭	水口明夏			
3年	③ニーズでチーム	生活と福祉	加藤真央	一生歩き続けられる足づくり	適切な爪の切り方を知っていますか。本当に自分の足に合った靴を履けていますか。身体の1/4の骨は足にあり、私たちの身体を支えています。足育てのプロから教わり、自分の足を知り元気な足を育て自分の足で歩もう！	11月5日
		体育	長岡郁子、 橋本陽貴			
2年	②時事的なテーマ	英語コミュニケーションⅡ	鈴木武志	家庭のコンポストから地産地消の野菜生産作り・地元野菜を使ったスイーツ作り・伝統野菜の継承	地元（西置賜地区）の高校生が取り組む地産地消、循環型社会、伝統野菜の継承について何ができるか、具体的な取組を知ろう。	10月15日
3年	③ニーズでチーム	ビジネス基礎	松田明子	外国人観光客の増加について	日本を訪れる外国人観光客は増加している。その事実をどう捉えるか？我々にとってどんなメリット・デメリットがあり、どう向き合っていくべきか。時事的な話題に触れながら視野を広げ、自分の考えを発表しよう。	11月25日
		国語表現	五十嵐遥佳			

【令和６年度の取組における成果】

教科の枠にとらわれない魅力的な本校独自の授業実践について研究し、生徒が主体的に学ぶ力を育てたいと考え、教科横断型授業の実践に取り組んだ。

教科書にはない学習課題が提示され、生徒にとって興味深い内容であることが多く、生徒がいつも以上に主体的に参加している様子が見て取れた。また、授業後の生徒の振り返りの記述の中には、複数の教科や観点から自分の考えや感想を述べているものが数多く見られ、生徒の多面的・多角的な視点の獲得につながっていることが伺えた。

今年度は、令和４・５年度よりも多くの授業実践を行うことができ、教員が日常的に教科横断型の授業を意識するようになり、また、職員研修でのスキルアップも後押しとなり、協働して授業開発を行う姿も見られた。実践した教員の感想から読み取れる成果としては以下のとおりである。

○ 生徒の興味関心を高めて学びに深みを持たせることができた。
○ リアルな声やリアルな体験ができたことは生徒の学びに繋がった。
○ 生徒が積極的で慣れてきた印象があり、授業の意図を組んでくれている生徒も一定数いた。
○ 活発な生徒にとって興味を引くテーマ設定ができた。
○ 他教科の担当教員が授業に来ることは生徒にとっても刺激となり集中していた。
○ いつもと違う環境で授業を行うと生徒の好奇心をかき立てることができた。

授業を実践した教員による生徒の見取りや感想より、教科横断型授業は生徒の学習意欲を高め、深い学びを促すことができる授業形態であると考察する。具体的には、普段とは異なる環境や複数の教員による授業が、生徒の知的好奇心を刺激し、興味関心を高め、学習意欲を向上させたと考えられる。また、複数の教科の視点を組み合わせることで、多角的な思考力や深い理解力を養い、単なる知識習得に留まらない、生きた学びを提供できたのではないかと推測できる。さらに、生徒の積極的な参加や主体的な取組が授業場面で見られ、より学習効果を高めることができた。

教員にとっても、教科横断的な視点の醸成や新たな教育手法の導入、教材開発のヒント等、教員の専門性向上や教育観に変化を与えることができており、授業力向上に貢献しているといえる。令和７年度以降も教科横断型授業を各教科の授業計画に取り入れていく素地ができたと考える。

【令和６年度の取組における課題】

最も大きな課題としては、学校全体のカリキュラムにはまだなっておらず、単発的な実践にとどまっていることが挙げられる。教員不足や多忙さから他教科の教員との時間調整や準備時間の確保が難しく、単発で終わってしまい、継続的な取組が難しい点や、深い学びを促す授業構成が形式的になってしまう等の課題が残った。

生徒の思考を深める問いや学習課題の設定にさらなる工夫が必要であり、教員の教材研究が今後も求められる。実践した教員の感想から読み取れる課題としては以下のとおりであろう。

- 他教科とタイミングを合わせて授業を行うというハードルの高さから単発で終わってしまう（単純なコラボで終わらない、より深い学びにつながる教科横断型授業を目指したい）
- 自由度を持った授業の構成が必要
- 教科書に沿った内容を年間の流れの中で実践できると良い
- 授業後の検証体制がとられておらず、事後の評価を残していくことが難しい
- 教員自身のアンテナの低さが課題
- 個々の生徒の特徴を踏まえたテーマ設定が大事
- 実施したいことはあるが、教員が忙しく頼みづらい状況にある（教員数が少なく業務が集中してしまうところがあり手が回らない）

また、教員の教科横断的な視点の不足や教育に対する感度を高める等の教員自身の意識改革の必要性や生徒の特性を踏まえたテーマ設定、社会との連携を意識した授業との両立等、検討すべき課題は多岐にわたる。各教科の令和７年度シラバスを作成する際、学校教育目標の達成を目指して教科横断型授業を年間で位置づけたものとするよう準備していくことが必要である。

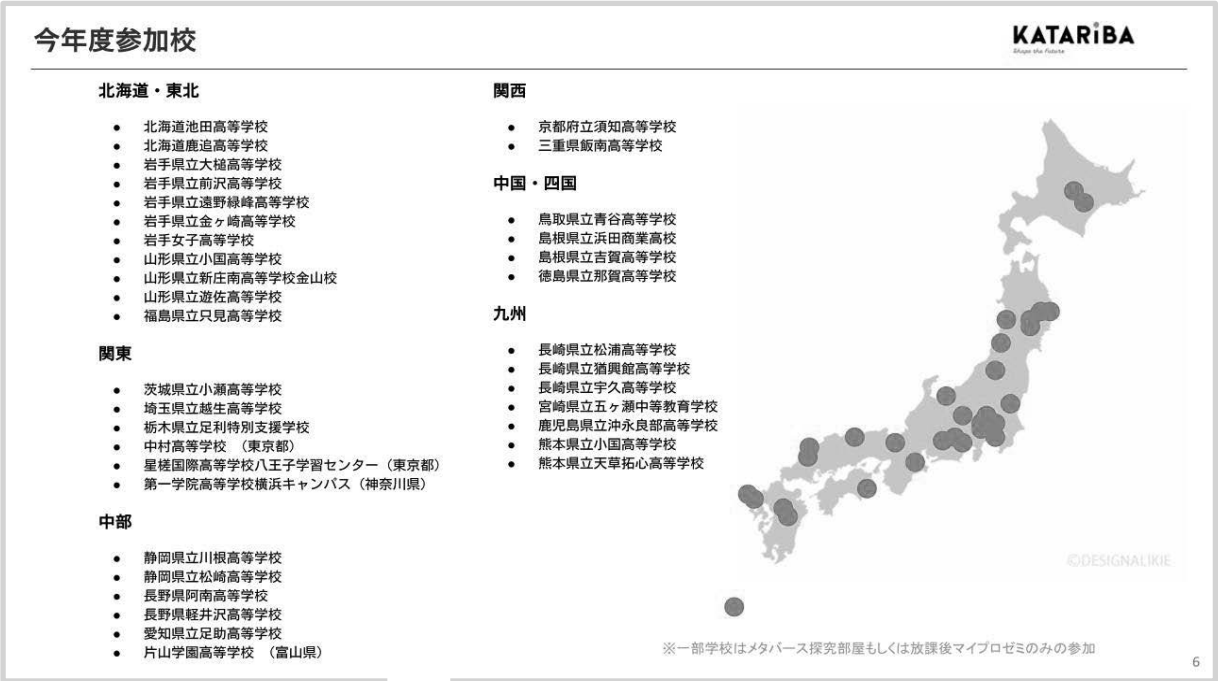
今後は、シラバス作成段階から教科横断を意識し、単発の授業ではなく、年間計画に組み込んだ継続的な実践や教員研修等の充実を通じて、教員自身の意識改革を促し、教え込むのではなく、生徒の知的好奇心を引き出す、深い学びに繋がる授業づくりについて研究したい。

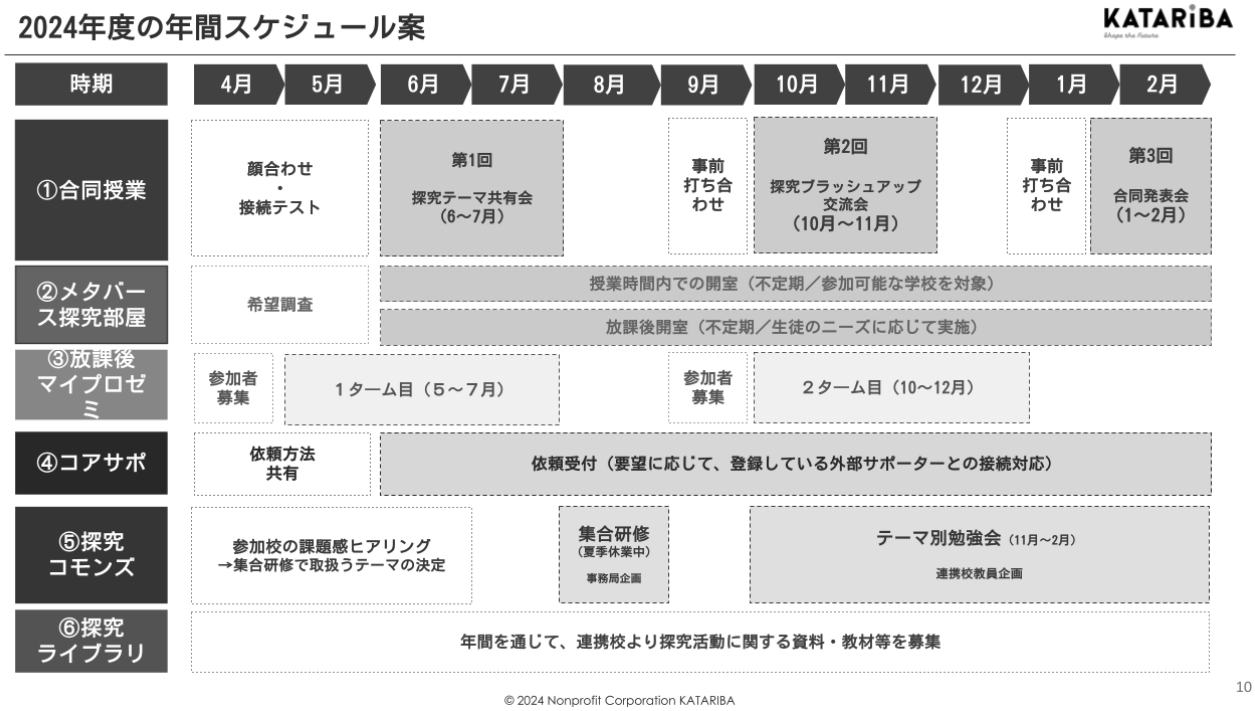
３．オンラインコミュニティの構築と進学希望者の学びの動機喚起

(1) 学校横断型探究オンライン合同授業の実施

【令和６年度の取組の概要】

探究における小規模高校の教育課題を解決するため、認定NPO法人カタリバと連携し、ＩＣＴを活用して学校同士をつなぎ、多様な教育資源を共有しながら興味・関心に応じて生徒が学び合いを行う学校横断型探究学習を行った。今年度の参加校は全国36校（1都1道1府19県）と大幅に増加したため、交流する高校は固定化せず、授業のタイミングの合う高校でグループを組むため毎回変更となり、交流の幅が広がった。連携内容は、①年３回の合同授業（オンラインによる相互支援）と２次元メタバースを活用した授業時間内での日常的な交流（メタバース相談部屋）、探究活動の深まりや意欲の向上のための放課後ゼミ、多様な大人と接続するコアサポーター制度等であった。更に、生徒だけでなく、教員向けの合同勉強会（合同研修、自主勉強会・交流会等の「探究コモンズ」）や連携校探究実践の共有（事例・資料共有「探究ライブラリ」）も行われた。





［オンライン合同授業の本校記録］

年月日	合同授業（内容）	交流校
2024/06/12(水) 13:30～15:20	第１回オンライン合同授業 （探究テーマ共有会）	茨城県立小瀬高校(35名)、埼玉県立越生高校(4名) 島根県立吉賀高校(35名)、徳島県立那賀高校(39名) 山形県立小国高校(28名)
2024/10/23(水) 13:30～15:20	第２回オンライン合同授業 （探究ブラッシュアップ交流会）	北海道池田高校(33名)、岩手女子高校(1年35名) 星槎国際高校八王子学習センター(20名) 山形県立小国高校(28名)
2025/02/20(木) 13:30～15:20	第３回オンライン合同授業 （合同発表会）	茨城県立小瀬高校(35名)、埼玉県立越生高校(4名) 徳島県立那賀高校(40名)、山形県立小国高校(28名)

【令和６年度の取組における成果】

第１回オンライン合同授業では、オンラインでの円滑なコミュニケーションにおける基本的な作法を学ぶとともに、今まで培ったコミュニケーション能力を発揮する場となったため生徒たちは自信を高めることができた。また探究につながる自らの興味関心を他校の生徒に発表し、質問やコメント等を交わしたことで今後の探究学習への意欲を向上させた。第２回オンライン合同授業では、探究学習の興味・関心が近い生徒同士でグループを作り、各自の探究活動を紹介し、意見交換を行った。生徒の感想では、「今までになかった新たな視点に気づくことができたり、全く違う探究テーマでやっている子の話を聞けて楽しかった」「自分のクラスの人にはない意見や考え、アイデアが多くてとても楽しかった」「将来の夢などの共通点があって共有できたことが楽しかった」「自分のテーマに共感してくれて自信が持てた」など、たくさんの学びや気づきを得ていた。第３回オンライン合同授業では、１年間の連携のまとめとして、それぞれの探究活動を発表したり、それを通じて得た学びを振り返ったりした。また、ゲストサポーターからの質疑応答やコメントを通じて、新しい気づきや発見が促される機会となった。全体的に、他校と連携することで少人数指導体制をカバーでき、生徒の幅広い興味・関心から始まる探究活動を支援する体制を構築することができた。その結果、生徒が自ら興味・関心のあるテーマを設定すること

ができ、やる気や主体性を高めることができた。また、他者とのコミュニケーションを通じて、伝える力や聞く力を身に付けることができたことから、考え方や視点の異なる同世代からの感想や助言を受容し、探究活動への意欲向上や活動を進めるための手段やヒントを得ることができた。

【令和６年度の取組における課題】

参加校が増えたことにより、交流校が毎回変更になるため、他校の探究カリキュラムの理解や生徒のオンライン合同授業に臨む姿勢・意識に差があり、一番のねらいである探究学習の深化につながらない場面も見受けられた。運営のNPO法人カタリバや連携校での交流を密にし、オンラインでより良い教育環境を整備する相互支援について検討していく必要がある。

⑵進学希望者の学びの動機喚起

【令和６年度の取組の概要】

当初は、オンラインでの交流により、多様な考え方に触れたり、大学生・社会人のサポーターとの関わりを持ったりする機会をキャリア形成に活かし、特に進学者希望者の意識向上につなげたいと考えていたが、思うように参加希望者が見込めず、また交流会等の開催のタイミングが本校カリキュラムと合わないことが多かった。そのため、令和５年度から本校と小国町（白い森学習支援センター）、リクルート（スタディサプリ）の三者連携による進学意識・志の涵養と学力向上を目的に進学希望生徒を対象にした「目標達成プロジェクト」を立ち上げた。令和６年度もプロジェクトを継続。リクルート職員によるガイダンスやスタディサプリの到達度テストをWEB実施にして素早い結果のフィードバックを行い、小国町白い森学習支援センターによる学習環境・講師・国数英の講習・自習室の提供、更には教員との進路面談等による学習意欲の維持に努めた。

【令和６年度の取組における成果】

本校と小国町（白い森学習支援センター）、リクルート（スタディサプリ）の三者連携により、進学希望生徒の意識を喚起することができた。特に１年生は、オープンキャンパスや夏期講習等に積極的に参加する姿が見られ、大学等への理解を深め、進路選択に必要な情報を得て、将来の目標を明確にする意識の向上が見られた。

【令和６年度の取組における課題】

進学希望の生徒が自主的に学習に日々取り組むような取組とまではなっておらず、十分に行うところまでは到達できなかった。進路実現に向けた強い動機付けについて研究する必要がある。

令和６年度　学校横断探究プロジェクト

第１回オンライン合同授業『探究テーマ共有会』

1.期　　日　令和６年６月 12 日(水)

2.時　　間　13:30～15:20(5-6 校時)

3.場　　所　Zoom

4.参加生徒　合計　141 名

山形県立小国高等学校　28 名　　茨城県立小瀬高等学校　35 名

埼玉県立越生高等学校　　4 名　　島根県立吉賀高等学校　35 名

徳島県立那賀高等学校　39 名

5.目　　的　小規模高校には地域資源と接続しやすいというメリットがある反面、多様な興味関心を持つ同年代や教員と出会うことが難しいというデメリットがある。そこでオンラインによる連携を活用し、それぞれの多様な興味関心に合わせたサポートができる体制を作る。今回は連携初回として、学校を超えて生徒同士が打ち解け合う機会とすることで、今後の研究学習への意欲を高める。また、聴く姿勢やオンラインコミュニケーションのマナーを身につけながら、互いの地域の違いや共通点を知る。

【学ぶ意欲】【対話力】

6.内　　容　・目的説明、オンラインコミュニケーションの作法について

・参加校代表者による学校紹介

・アイスブレイク(自己紹介、地元紹介、最近あった嬉しいこと等)

・興味関心又は探究テーマの共有(なぜ関心を持ったのか、聞いてみたいこと等)

・感想共有

7.生徒の声

・色々な考えに触れることができて、視野が広がった。

・みんな違う観点でテーマを考えていてすごく新鮮だった。アイスブレイクのときに少し電波の関係で進まなくなってしまったけど、積極的にこうしたらどうですか、など発言できた。みんなともフリートークなどで楽しく相手のことを知れたので良かった。交流できてとても良かったと感じた。

・それぞれの関心のあることを話し合ったりすると自分のプロジェクトの改善点や新しい企画の材料になることが学べた

8.状況写真

令和６年度　学校横断探究プロジェクト

第２回オンライン合同授業『探究ブラッシュアップ交流会』

1.期　　日　令和６年10月23日(水)

2.時　　間　13:30～15:20(5-6校時)

3.場　　所　Zoom

4.参加生徒　合計　116名

山形県立小国高等学校　28名　　北海道池田高校　33名

星槎国際高等学校八王子学習センター　20名　岩手女子高等学校　35名

5.目　　的　関心が近い生徒同士でオンライングループをつくり、各自の探究活動を紹介し、意見交換を行う。学校を超えて興味関心について交流することで、自身の探究を深めるヒントを得るとともに、学び合うことができる多様な同級生や伴走者と出会う機会とする。

6.内　　容　・挨拶、オンラインコミュニケーションの作法

・アイスブレイク(自己紹介、放課後の過ごし方、最近あったうれしかったこと)

・探究活動共有

取り組んでいるテーマ

これまでに起こしたアクション

これまでにわかったこと

今後の計画

悩んでいること

感想共有

7.生徒の声

・探究内容が違っていても、そのテーマ設定の元となった部分に、将来の夢などの共通点があり、共有できたことが楽しかった。

・今まで和菓子という概念に囚われていたけど、今回の授業で視野が広がった。食べ物は色々な味があり、可能性がたくさんあるのでこれからもっと頑張っていきたい。

・自分では全く考えもしなかった視点で計画を立てている人がいて、自分のプロジェクトだけではなく、今後の生活にも活用したいと思った。

・小国町の印象や自分が気付かなかった新しい考えがあった。

8.状況写真

４．教職員研修

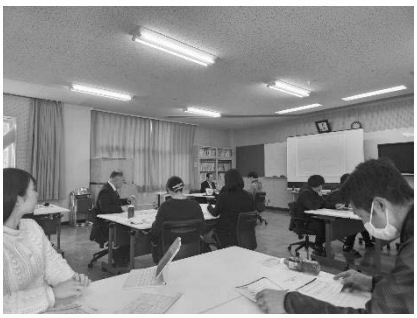
本校では、「白い森人育成プログラム」と題してキャリア教育を行っている。生徒が「白い森人」を目指して学んでいるので、教職員も同様にという意味を込めて、職員研修のことを「白い森人研修」と称し、年４回実施した。

白い森人研修①～チームビルディング～

１．期　日　令和６年４月２日(火)
　　第１部：10:00~12:00/第２部：13:30~15:30
２．場　所　小国高校 地域協働ルーム
３．参加者　教員、コーディネーター、寮アシスタント、高校魅力化推進室室長、高校魅力化推進室主査、カリキュラム等開発専門家（岡崎エミ氏）
４．内　容
■第１部
・情報共有：グランドデザインについて(校長)
　　地域協働と地域みらい留学について(高校魅力化推進室長)
　　もりたんの成り立ちについて(長岡)
・ワーク：　「小国高校(生)だけでなく小国町も幸せを感じるためにどんなゴールを目指すと良いのかを」を未来志向で考える
　　その未来像に近づくためには、今年度の授業や活動でどんなことをしたらいいか具体的なアイデアを出す
■第２部
・情報共有：令和の時代に求められる「新たな教師の学びの姿」を実現する必要性について(岡崎エミ氏)
　　(国事業)創造的教育方法実践プログラム(これまでの取組と今年度の重点やテーマ)について（佐藤喜）
・ワ ー ク：今年度の国事業の具体的方策を決める(自学自習力をつける授業とは。生徒の学習への動機付けを高める仕掛けをもとに仮説を作る)
・今年度の自分の目標(やるべきこと・やりたいこと)を設定し、全体共有
５．状況写真

白い森人研修②～探究～

1. 期　日　令和 6 年 5 月 17 日(金)
2. 時　間　14:55～16:55
3. 場　所　小国高校 会議室
4. 参加者　全職員、コーディネーター
5. 目　的　本研修では、プロジェクトを立てる意味やプロジェクトの作り方について、生徒の立場に立って模擬授業を体験することで、学習者中心の授業づくりにつなげる。また、想定される生徒のつまづきについて考え、個別の伴走方法のイメージを持つ。
6. 講　師　岡崎　エミ氏(一般財団法人地域・魅力化プラットフォーム研究開発部研究開発員)
7. 内　容
   - オープニング(講師自己紹介、趣旨説明)
   - チェックイン(3～4 人 1 組でチェックインカードを使用して行う)
   - レクチャー(マイプロの流れを説明)
   - 発表(グループに分かれリサーチクエスチョンの発表)
   - ワーク①(リサーチクエスチョン作成までで難しかったことを共有)
   - ワーク②(ワーク①の困難さの原因を出し合い、解決すべき課題を見つける)
   - 振り返り
8. 受講者の声
   - 複数枚あるワークシートの繋がりを教員は理解しているが、生徒は理解できていないのではないか。
   - 探究には個人差もあるので、全てのワークシートを事前に全員へ渡し、個人のペースで使用できるようにしてはどうか。
   - 生徒は多様な社会課題に触れることが少ないと感じる。授業内でも社会課題に触れることができる仕組みづくりをしていなかった。
   - 週 1 回各教科の中で短いニュース等を動画視聴することで、社会課題に触れる機会をつくってはどうか。
   - 大人は知識量も多い為、プロジェクトを立てやすいが生徒は難しく感じていると思う。探究の先行事例を動画で視聴することで探究の流れや方法を理解できるのではないか。
   - 先輩のプロジェクト動画を視聴した後に『WILL・CAN・NEED』に振り分けることで、理解が深まり、書き出しやすくなるのではないか。
9. 状況写真



白い森人研修③～伴走～

1. 期　日　令和6年8月20日(火)
2. 時　間　9:30～11:30
3. 場　所　小国高校 会議室
4. 参加者　全職員、コーディネーター
5. 目　的　本校では「挑め、ともに！」をテーマに、生徒が様々なことに挑戦する過程で、教職員が「伴走者」として支援することを重視している。特に、生徒の自主的な取り組みを尊重し、問題解決を重視した指導が行われている。ただし、伴走には定型的な方法はなく、生徒一人ひとりに合った支援が求められる。そのため、教職員がどのような心構えで生徒と向き合うかが重要。今回の研修では「なぜ伴走するのか」を考え、教職員の生徒観や学習観を見直す。
6. ファシリテーター　山科勝校長
7. 使用する文献　　佐伯　胖(2004)『「わかり方」の探究-思索と行動の原点-』小学館
7. 内　容　(1)アイスブレイク
(2)文献の中から第3章第1節“「遊ぶ」ということの意味”を読み、それぞれがなるほど、と同意できる文章、②大事なことを述べていると感じるが意味を十分理解できない文章、③読んで理解できなかった文章に傍線を引く。
(3)3～4人のグループで①～③を紹介し合い、①～③についての解釈やお互いの考えそれに関連した具体的な事例を述べ合う。
(4)いくつかのグループからグループで話題に上がったことを紹介してもらい、さらにグループで話し合い、伴走する意味や大切さ、教職員の心の持ち方について、一人ひとりの考えを深める。
8. 受講者の声
・生徒のアプリシエイションがより感じられるために、大人がどのように伴走すべきか意識していきたい。
・本校生徒の励みにはどのようなものがあるのかを、生徒の様子から見取っていきたい。
9. 状況写真

白い森人研修④～2学期振り返り～

1.期　日　令和6年12月23日(月)
2.時　間　13:30～15:30
3.場　所　小国高校 3年1組教室
4.参加者　全職員、コーディネーター
5.目　的　本校教職員が参加した外部研修や視察等で得た情報や知見を校内で共有することで、今後の本校の教育活動に役立てる。また、現在検討しているカリキュラム構想の進捗報告を受けて、本校の教育活動についての内省や本校の特色・魅力を再認識し、3学期ならびに次年度の取り組みにつなげる。
6.内　容　(1) 各種研修・視察等報告

○海外研修参加報告　報告:髙橋謙介教諭

・教師海外派遣事業(ザンビア、2024年度JICA東北・JICA二本松教師海外研修)
・中国政府日本教職員招へいプログラム(文科省委託 令和6年度新時代の教育のための国際協働プログラム初等中等教職員国際交流事業)

○学校視察報告

・秋田県立仁賀保高校　報告:佐藤喜紀教諭
・新潟県立中条高校　報告:長岡郁子教諭
・山形県立遊佐高校　報告:水口明夏養護教諭
・遊佐町役場　報告:片岡隆史コーディネーター

(2) カリキュラム検討ワーキンググループによる協議の進捗報告
報告:舟山知美教頭

(3) 令和7年度グランドデザイン(素案)について　報告:山科勝校長

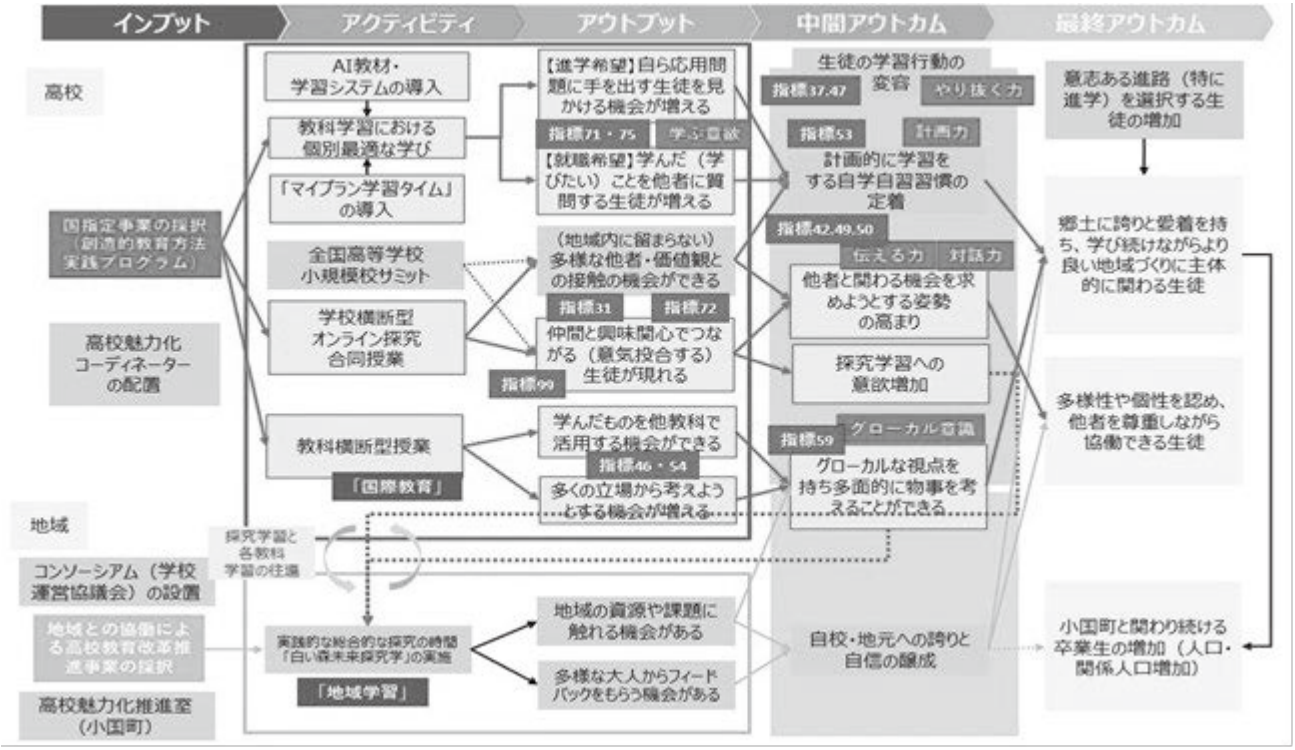
(4) 進学学習支援について　報告:松田明子教諭

7.状況写真

第３部
事業の評価

１．ロジックモデルについて

本事業最終年度にあたり、令和４年度（１年次）に作成したロジックモデルを運営指導委員の協力を得て、次のように整理し直した。



※ 指標の番号は「高校魅力化評価システム」（後述）の設問番号に対応している。

① インプット

インプットとして、本事業における取組の他に、令和１～３年度文部科学省指定「地域との協働による高校教育改革推進事業」（以下、前事業）の採択により導入された高校魅力化コーディネーターの配置やコンソーシアムの設置、小国町教育委員会に設置されている高校魅力化推進室がある。これらは、本校の教育活動の基盤となっており、特徴的なものである。

② アクティビティ

上記のインプットによるアクティビティとして、○教科学習における個別最適な学び、○教科横断型授業、○学校横断型オンライン探究合同授業を行う。

教科学習における個別最適な学びを支えるアクティビティとして、ＡＩ教材などの新しい教育方法や「マイプラン学習タイム」の導入を行う。それにより「教科学習」「探究学習」「進路希望の実現」の個別最適化を実践した。

教科横断型授業では、本校と小国町教育委員会とが連携して推進している保小中高一貫教育の柱の一つである「国際教育」を含めて、実社会にあるテーマや学際的な課題、複数の教科にまたがる本質的な内容を学ぶこととした。

学校横断型オンライン探究合同授業では、教員定数が少なく、教員の専門性のリソースが限られているという小規模校特有の課題を、ＩＣＴを用いて学校という枠を超えて交流することで克服することを目指した。これらを統合したカリキュラムを展開することとした。

加えて、前事業で開発した実践的な探究学習のカリキュラムである「白い森未来探究学」（総合的な探究の時間）による「地域学習」と各教科学習との学びの往還を図ることで、生徒が実感

を伴って学習活動を自分のこととして捉え、理解を深めていくようにすることにも努めた。
さらには前事業以前から実施している「全国高等学校小規模校サミット」も継続して行うこととした。

③ アウトプット

アクティビティの結果（アウトプット）として、次のことが得られると考えた。
教科学習における個別最適な学びにおいては、生徒に自ら学ぶ力が育成されると考えられる。学力が上位の生徒については、学校の授業で扱う問題や教材以外に、自ら応用問題や発展的な課題を見つけ取り組む生徒が増える。また、学力がそれほど高くない生徒においても、授業等で学んだことやこれから学びたいことを他の生徒や教員に質問するなど、学習に対しての学ぶ意欲が表出する場面が多くなる。
教科横断型授業により、ある教科で学んだ内容やスキル、ものの見方を別の教科でも活用できることに気づいたり、それらを用いて課題解決する機会をつくったりできる。また、ある一つの事象であっても、いくつかの教科科目の側面から見る経験をすることで、一面からだけではなく、多くの視点や立場から考えようとする機会が増える。
学校横断型オンライン探究合同授業及び全国高等学校小規模校サミットにより、小国町という限られた範囲の地域だけでなく、多様な生活背景や学習履歴を持つ他者やその他者の価値観に触れることができる。なおかつ、小規模校である本校内だけでは出会えないかもしれない、共通の興味関心を持つ仲間と意気投合する機会を創出できる。
上記の３つを支えるのが、前事業で培った地域とのつながりである。地域の資源や課題に触れながら、地域で暮らす大人（多様な職業や考え方）からコメントや助言といったフィードバックをもらう機会があることで、生徒は地に足がついた考えを持ちながら、広い視野で考えることが可能となる。

④ 中間アウトカム

上記のアウトプットから６つの中間的な成果（中間アウトカム）が得られると考えた。
○ 生徒の学習行動の変容
○ 計画的に学習をする自学自習習慣の定着
○ 他者と関わる機会を求めようとする姿勢の高まり
○ 探究学習への意欲増加
○ グローカルな視点を持ち多面的な視点の獲得
○ 自校・地元への誇りと自信の醸成

⑤ 最終アウトカム

最終的な成果（最終アウトカム）として、本校のグラデュエーション・ポリシー（ＧＰ）を高いレベルで達成した生徒が育成されると考えた。具体的には、意志ある進路選択（特に進学）できる生徒の増加により、郷土に誇りと愛着を持ち、学び続けながらより良い地域づくりに主体的に関わる生徒が育成され、その生徒たちが将来も小国町と関わり続けることで人口増加や関係人口増加に積ながっていくのではないだろうか。また、生徒が多様性や個性を認め、他者を尊重しながら協働できたり、健康で豊かな人間性を持ち、新たな価値創造に挑むことができたりするようになることで、将来、主体的に地域創生に貢献できる人材へと育ってくれると考える。

２．ロジックモデルをもとにした事業の評価方法

①「高校魅力化評価システム」を活用した評価

全校生徒を対象に、三菱ＵＦＪリサーチ＆コンサルティングによる「高校魅力化評価システム」のアンケートを毎年７月（１回目）と１２月（２回目）に実施している。そこに含まれる多様な指標をもとに、スクール・ポリシーや魅力ある高校づくり（高校魅力化）の達成状況を把握することで、学校全体としての教育活動の現状を知ることができる。また、１回目調査は、全国の高校と比較が可能である。

ロジックモデルの各項目の達成状況を評価するために、「高校魅力化評価システム」のアンケート結果を指標として活用することとした。指標として用いるアンケート項目は、次の通りである。指標となる項目の先頭の番号は設問番号であり、ロジックモデルの図の指標番号に対応している。

本事業に係る指標一覧（高校魅力化評価システムのアンケート）

ロジックモデルに記載している指標	アンケートの質問内容
31：探究性に関わる学習環境	お互いに問いかけあう機会がある
37：主体性に関わる自己認識 【やり抜く力】	うまくいくか分からないことにも意欲的に取り組む
42：協働性に関わる自己認識 【対話力】	相手の意見を丁寧に聞くことができる
46：探究性に関わる自己認識	勉強したものを実際に応用してみる
47：社会性に関わる学習環境 【やり抜く力】	忍耐強く物事に取り組むことができる
49：協働性に関わる自己認識 【伝える力】	自分の考えをはっきり相手に伝えることができる
50：協働性に関わる自己認識 【伝える力】	友達の前で自分の意見を発表することは得意だ
53：主体性に関わる自己認識 【計画力】	自分で計画を立てて活動することができる
54：探究性に関わる自己認識 【思考力】	一つ二つの立場だけでなく、できるだけ多くの立場から考えようとする
59：社会性に関わる自己認識 【グローカル意識】	地域で起きている課題と世界で起きている課題は、お互いに関連しあっていると感じる
71：主体性に関わる行動 【行動力】	授業で分からないことについて、自分から質問したり、分かる人に聞きにいったりした
72：協働性に関わる行動	自分の考えについて、様々な人に意見やアドバイスを求めた
75：探究性に関わる行動 【行動力】	授業の内容について、「なぜそうなるのか」と疑問を持って、自分で考えたり調べたりした
99：独自設定質問	多様な同年代と関わることで、視野が広がり考えが深まった

※【】内は、本校で定めた育成したい資質・能力の柱「主体性」「挑戦心」「協働力」（３つのおぐパワ）に紐づく「20の育てたい資質・能力」についての位置づけ

②「ＧＰルーブリック」アンケートを活用した評価

本校では、ＧＰの達成状況を図るために、卒業直前の生徒を対象に「卒業時に身に付けたい資質・能力（グラデュエーション・ポリシー）ルーブリック」アンケートを実施している。個人内評価として、生徒が３年間で身に付けたと感じる資質・能力をレベル１～５で自己評価することで、卒業後の生徒の自信につなげるとともに本校における教育活動の成果指標の一つとしている。本事業の評価のうち、最終アウトカムの評価に「ＧＰルーブリック」アンケートの結果を用いる

こととした。ＧＰルーブリックの項目は、次のとおりである。

項目①　郷土に誇りと愛着を持ち、学び続けながらより良い地域づくりに主体的に関わることができる（主体性）

レベル１	レベル２	レベル３	レベル４	レベル５
しようとしなかった	自分は価値ある存在であることを理解し、自分の考えや意見を言うことができる	・自分の強みを理解し、自分の意志で選択することができる ・自分と地域や社会の幸せな姿をイメージできる	・自分の強みを理解し、自分にあった進路選択ができる ・自分と地域や社会の幸せの実現を目指し、活動しようとしている	自分の強みを生かし、自分と地域や社会の幸せの実現に向けて、学びを行動につなげることができる

項目②　健康で豊かな人間性を持ち、新たな価値創造に挑むことができる（挑戦心）

レベル１	レベル２	レベル３	レベル４	レベル５
できなかった	地域や社会の課題に対して疑問を持ち、問いにつなげることができる	共感力を発揮し、自ら課題を設定し、のぞむ未来の実現にむけて挑むことができる	自ら課題を設定し、多角的な視点を持ちながら、自らのぞむ未来をつくるために、挑み、やり抜くことができる	試行錯誤を繰り返しながら、自分のアイデアを社会的に意義のあるものに高め、新たな価値を創造することができる

学校目標③　多様性や個性を認め、他者を尊重しながら協働できる（協働力）

レベル１	レベル２	レベル３	レベル４	レベル５
できなかった	どんな人でも尊重すべき相手として向き合い、相手の意見を受け止め、自分の意見を伝えることができる	多様性を認め、自らの得意・不得意を自己開示し、目的達成のために協力することができる	自分の役割と責任を持ち、リーダーシップを発揮し、互いに補い合いながら、目的を達成することができる	年齢や立場、価値観の違う相手とでも、対話により意見の一致をはかり、困難なことがあっても粘り強く、よりよいゴールを達成できる

３．アクティビティごとのアウトプット及び中間アウトカムについて

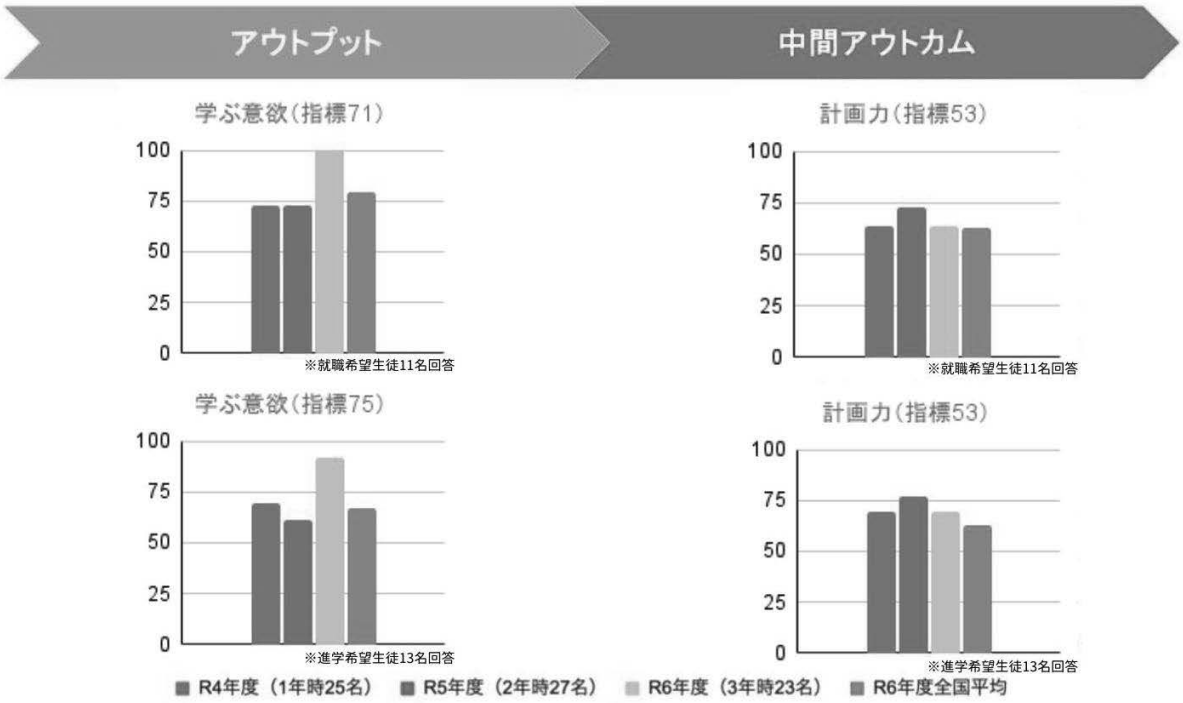
①教科学習における個別最適な学びの評価

本事業に取り組み始めた令和４年度入学生について、アウトプットの指標として設定した指標71・75「学ぶ意欲」及び中間アウトカムの指標として設定した指標53「計画力」を令和４～６年の３年間で追跡調査した結果をまとめたものが、下の図である。

アウトプットの指標71・75ともに令和４年と比べ令和６年の肯定的な回答の割合が大きく伸びていた。教科学習において個別最適な学びを意識的に提供することにより、生徒の学力や個性に合わせて学ぶ機会が保証され、満足度が高まったものと考えられる。

一方、中間アウトカムについては、令和４年から５年にかけては肯定的な回答が増えていたが、令和６年は令和４年と同程度の割合に戻っていた。このようになった要因について振り返ると、第２学年後半から第３学年前半にかけて個々の学習計画の立案を生徒任せになっていた場面が多かったためではないかと思われる。

このことから、個別最適な学びは学ぶ意欲を高めることに有効であるが、自発的に生徒自らが目標設定を行ったり目標達成のための計画性を高めたりするようになるまでは時間がかかり、その間は継続的に支援する必要があると推測される。自ら計画して学び続ける生徒を育てるためのアクティビティを今以上にカリキュラムへ意図的に組み込む必要があることが示唆された。

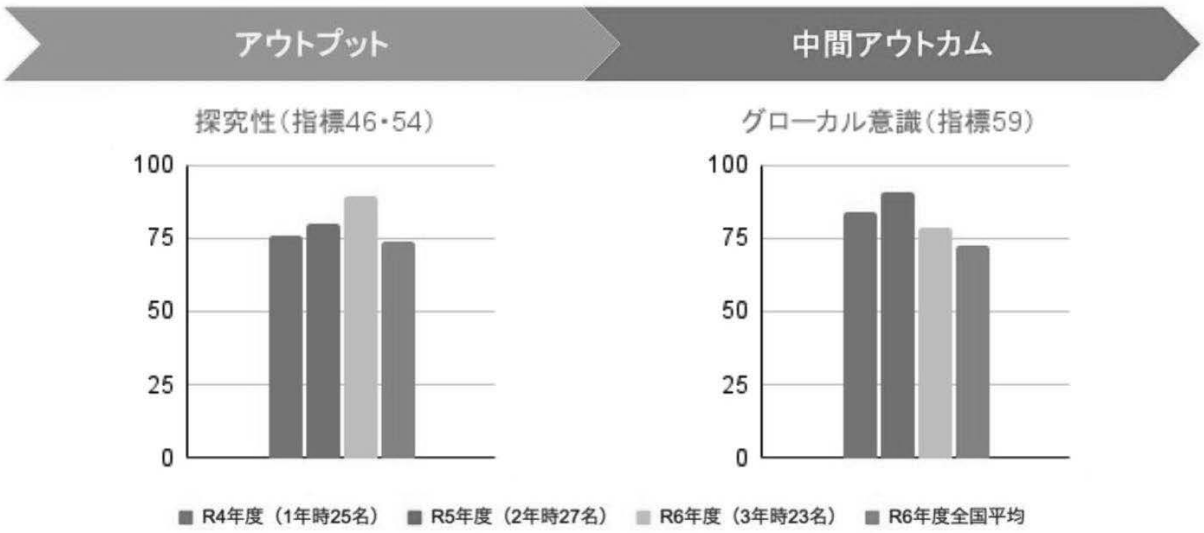


②教科横断型授業の評価

本事業に取り組み始めた令和４年度入学生について、アウトプットの指標として設定した指標46・54「探究性」を合わせた結果と中間アウトカムの指標として設定した指標59「グローカル意識」の結果を３年間で追跡調査したものをまとめたものが、下の図である。

アウトプットとして設定した「学んだものを他教科で活用する企画ができる」や「多くの立場から考えようとする機会が増える」の「探究性」は、学年が進むごとに伸びてきており、教科横断型授業や白い森未来探究学の取組の成果と考えられる。また、教科横断型授業により教科学習と白い森未来探究学で学んだ内容が生徒の中で関連付けられたのではないかを推測される。

また、アウトカムとして設定した「グローカル意識」は、第２学年時では肯定的な回答の割合が高くなったが第３学年時は降下していた。教科学習における個別最適な学びと同様に中間アウトカムを高い割合で保持するためには、定期的・継続的にグローカル意識を高めるような授業や学校行事に生徒が触れることが大切かもしれない。世界を視野に入れた学習課題に取り組むことや多様な人たちと交流することなどを３年時にも行い、より地域の課題解決や社会貢献に向かう意識を養うよう、教職員の共通理解を図る必要がある。

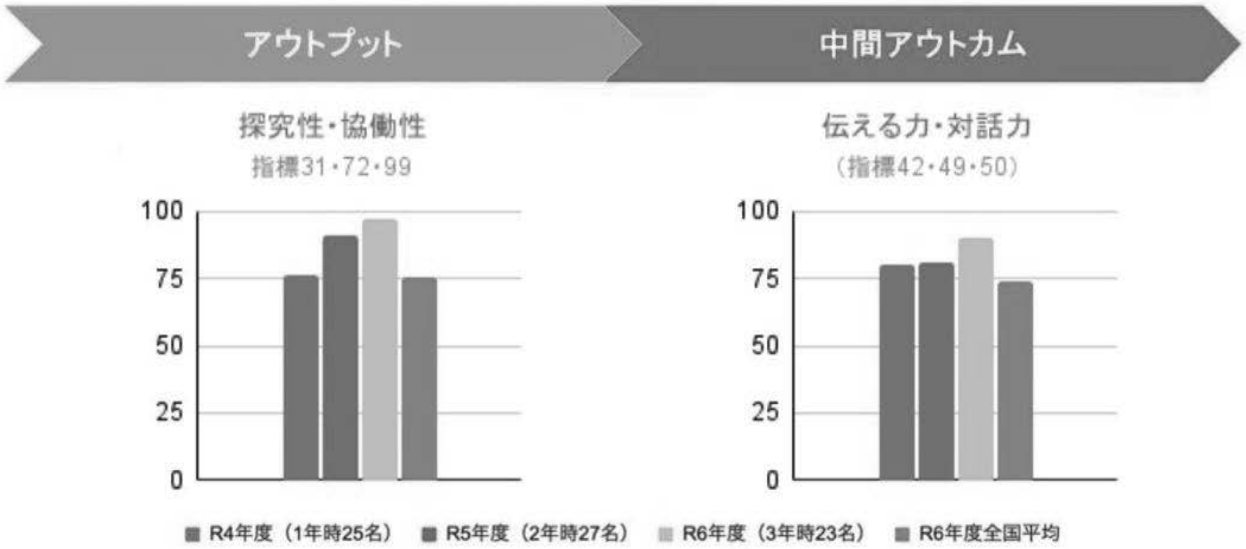


③学校横断型オンライン探究合同授業の評価

本事業に取り組み始めた令和４年度入学生について、アウトプットの指標として設定した指標31・72・99「探究性」「協働性」を合わせた結果と中間アウトカムの指標として設定した指標42・49・50「伝える力・対話力」を合わせた結果を３年間で追跡調査したものをまとめたものが、下の図である。

アウトプットとして設定した指標31・72・99「多様な他者・価値観との接触」「興味関心でつながる仲間の存在」については、学年を追うごとに肯定的な回答の割合が高くなっていることが分かる。また、第１学年時には全国の高校とほぼ同じ程度であったが、第３学年は非常に高い割合となっていた。これは、学校横断型オンライン探究合同授業だけではなく、全国高等学校小規模校サミットや白い森未来探究学、国際教育等のカリキュラム全体を通して、地域の大人、全国の高校生、海外の高校生と出会い、相手を尊重しながら意見交流する経験から、多様性を尊重することや仲間とのつながりを大切にすることが重視された成果と言えるのではないだろうか。

また、中間アウトカムとして設定した「伝える力・対話力」についても学年が進むにつれ、肯定的な回答の割合が高くなっていた。これも、カリキュラム全体で「コミュニケーション能力」を培う場面が多いため、どの生徒も他者との対話に対して自信を深めていたことが推察される。



４．最終アウトカムについて

①　ＧＰルーブリックの結果による評価

令和７年３月に、令和４年度入学生である３年生２４名を対象に「卒業時に身に付けたい資質・能力（グラデュエーション・ポリシー）ルーブリック」アンケートを行った。卒業時の到達目標はレベル４以上とした。

レベル４以上と回答した割合は主体性95.8%、挑戦心79.2%、協働力87.5%であり、極めて高かった（下図）。また、レベル４以上の回答をした生徒は、地域への愛着や自己理解の深まり、意志ある進路選択、多様性の理解等、探究活動や年齢や価値観の異なる他者との対話や協働を通して成長を実感したと記述していた。

②　「高校魅力化評価システム」の結果による評価

「高校魅力化評価システム」全体を通して、全体的に肯定的な回答の割合が高く、全国の他地域と比較しても高い割合を示している項目が多い。特に、主体性や探究性に関する項目が他地域と比べても10ポイント程度高い回答となっている。次ページの図は、１回目調査についてまとめたものである。

話し合った内容をまとめ、発表する活動について肯定的な回答が多かった（本校　84.5%　全国　65.9%）。授業で分からないことについて、自分から質問し自主的に調べ物を行うと回答している割合が多く（本校　87.0%　　全国　70.3%）、教科学習における個別最適な学びを通して学習意欲が喚起されていることとの関連があると考えることができる。

また、「勉強したものを実際に応用してみる」ことに肯定的な回答が多い（本校　79.7%　全国　68.2%）ことも挙げられ、教科横断型授業の効果が表れているのかもしれない。このことに関連して興味深いのは、新しい技術やサービスを生み出したいと考えている生徒が、本事業の経過とともに増加している（本校R4　47.1%、R5　46.1%、R6　53.6%）ことである。

課題としては、客観的な証拠に基づき考え判断することや科学的視点から課題解決にあたることについては、全国の他地域と比較して肯定的な回答が少ないこと（本校　37.7%　　全国　46.9%）や現在の日常生活への不安や心配事がない生徒（実施校44.9%　全国53.5%）、日本の将来を明るいと思う生徒（実施校39.1%　全国46.7%）の割合が、全国よりも低い傾向にあることである。地域で活動し自己肯定感や自己効力感は育成されつつあるが、これからも継続して取組を行っていきながら生徒一人一人が自分に自信を持ち、未来に希望を持てるようにしていく必要を感じる。

小国高等学校　「卒業時に身に付けたい資質・能力（GP）ルーブリック」アンケート

氏名（　　）

卒業まであとわずかとなりました。
小国高校では、生徒の皆さんに「主体性」「挑戦心」「協働力」を身につけてほしいと考え、様々な機会を設け学びをデザインしています。３年生の皆さんが卒業を控えた今の時点で、この３つの資質・能力（グラデュエーション・ポリシー）がどの程度身についていると実感しているかを教えていただき、今後の小国高校の教育活動に活かしていきたいと思っています。また、このアンケートに回答することで、皆さん自身に身についた力を実感してもらいたいというねらいもあります。ご協力をよろしくお願いします。

実施日：2025年2月19日(水)実施
対象：令和4年度入学生24名

学校目標①郷土に誇りと愛着を持ち、学び続けながらより良い地域づくりに主体的に関わることができる

○をつける→	レベル１	レベル２	レベル３	レベル４（到達目標）	レベル５
主体性	できない	自分は価値ある存在であることを理解し、自分の考えや意見を言うことができる	・自分の強みを理解し、自分の意志で選択することができる ・自分と地域や社会の幸せな姿をイメージできる	・自分の強みを理解し、自分にあった進路選択ができる ・自分と地域や社会の幸せの実現を目指し、活動しようとしている	自分の強みを生かし、自分と地域や社会の幸せの実現に向けて、学びを行動につなげることができる
レベル４以上：95.8%	**０名（0.0%）**	**１名（4.2%）**	**０名（0.0%）**	**１４名（58.3%）**	**９名（37.5%）**
その評価にした理由 (具体的な経験を含む) ※レベル４以上回答者の理由	授業だけではなく休日も、地域の行事やイベントに参加してきたから。／白い森未来探究学を通して地元の魅力を見つけることができたから。／地域の大人と関わりながら、自分の出来ることとニーズをつなぎ合わせて何が出来るか考えることが出来たから。また、今後も学び続け、地域社会に貢献したいと感じているから。／地元が好きになったから。／地域学習を積極的に行えた。／自分の強みを進路選択に活かすことができた。				

学校目標②健康で豊かな人間性を持ち、新たな価値創造に挑むことができる

○をつける→	レベル１	レベル２	レベル３	レベル４（到達目標）	レベル５
挑戦心	できない	地域や社会の課題に対して疑問を持ち、問いにつなげることができる	共感力を発揮し、自ら課題を設定し、のぞむ未来の実現にむけて挑むことができる	自ら課題を設定し、多角的な視点を持ちながら、自らのぞむ未来をつくるために、挑み、やり抜くことができる	試行錯誤を繰り返しながら、自分のアイデアを社会的に意義のあるものに高め、新たな価値を創造することができる
レベル４以上：79.2%	**０名（0.0%）**	**１名（4.2%）**	**４名（16.7%）**	**８名（33.3%）**	**１１名（45.8%）**
その評価にした理由 (具体的な経験を含む) ※レベル４以上回答者の理由	自分で課題を見つけ、最終目標を立て、その目標を達成するために自主的に行動ができたから。／物事を多角的にみる視野の広さや、第三者として俯瞰的に捉えることができるようになったことによって、見えるようになる新しい一面と可能性を自分の中にある知識や技術と結びつけて何か新しいものが出来る感覚が楽しかったから。／サミットのコアメンバーや、生徒会執行部の活動など、多くのことにわたって課題を見つけ出し、解決するためにどういうやり方でやっていくかなどを考えて３年間生活してきたから。／アイディアを出し、新しい視点を持って活動できたから。／自分で考えて活動する機会が多々あって、そこで沢山のことを体験することが出来たから。／様々な活動を通して最後まで取り組むことができたから。				

学校目標③多様性や個性を認め、他者を尊重しながら協働できる

○をつける→	レベル１	レベル２	レベル３	レベル４（到達目標）	レベル５
協働力	できない	どんな人でも尊重すべき相手として向き合い、相手の意見を受け止め、自分の意見を伝えることができる	多様性を認め、自らの得意・不得意を自己開示し、目的達成のために協力することができる	自分の役割と責任を持ち、リーダーシップを発揮し、互いに補い合いながら、目的を達成することができる	年齢や立場、価値観の違う相手とでも、対話により意見の一致をはかり、困難なことがあっても粘り強く、よりよいゴールを達成できる
レベル４以上：87.5%	**０名（0.0%）**	**１名（4.2%）**	**２名（8.3%）**	**４名（16.7%）**	**１７名（70.8%）**
その評価にした理由 (具体的な経験を含む) ※レベル４以上回答者の理由	年齢が違う人とでも意見を交わすことができてより良い考えを生み出すことができたから。／特に留学生や移住者の方々とたくさん関わってきて、自分とは価値観の違う方と接して、互いに考えを尊重し、多くの学びをいただいたから。／授業などでも多様性について学んで、地域の方々との交流を通して学ぶことが出来たからです。／意見の違う人の話も聞くなど色んな人の意見を聞いて、多様な考えを尊重できたから。／何があっても、自分と違っていてもその人はその人という視点を忘れずに、生活することができたから。				

③　事業全体の評価

本事業の目的は、ＩＣＴやＡＩなど新しい教育方法を活用し、「教科学習」「探究学習」「進路希望の実現」の個別最適化を実践し、小規模校特有の課題を克服するとともに、本校がＧＰのキーワードとして掲げている主体性、挑戦心、協働力の３つを伸ばすことであった。それらの伸長度合いについては、ここまでの分析から一定の成果があったと考えられる。

特に、令和３年までに開発した「白い森未来探究学」（総合的な探究の時間）による地域との協働体制をベースとしながら、教科学習への学習意欲喚起、教科横断型授業による多角的・多面的なものの捉え方やグローバルな視点の獲得、学校横断型オンライン探究合同授業による多様な他者と触れる機会等が新たに創出されたことにより、ある程度満足できるレベルの最終アウトカムが得られたことが、本事業の成果であるといえる。得られた成果を活かしていくよう、事業終了後も教育課程に実装し、本校の特色ある取組として定着させていくことを考えている。

また、本事業に取り組むことにより、中間アウトカムが十分得られなかった部分が明確になり、カリキュラム改善の方向性が示された。これもモデル校として事業に取り組んだからこそ知ることができた成果であろう。

山形県立小国高等学校 2024年度 今回の結果（まとめ）※ 1回目調査のみ

結果の読み取り方

このポートフォリオでは、以下の5側面、4領域、3軸により、高校と地域の学びの「今」と「変化」を読み取ることができます。

5つの側面を
=> 各校・地域の状態を、「①学習活動」「②学習環境」「③生徒の自己能力認識」「④生徒の行動実績」「⑤ウェルビーイング」の5つから把握しています。

4つの領域から
=>各設問を「主体性」「協働性」「探究性」「社会性」の4つの資質・能力に関する領域に分類しています。

3つの軸で
=>上記のデータを「時間軸(前年度からの伸び)」「属性軸(学年・学科等による違い)」「地域軸(他地域との比較)」の3つの軸で把握可能です。

結果に出てくる数字や言葉は次の意味を表しています。

【肯定的回答割合(%)】
各項目で「4.あてはまる／よくする」「3.どちらかといえばあてはまる／ときどきする」という肯定的回答をした割合
※ 0～10の11段階で回答する「幸福度」「生活満足度」のみ、6以上の回答割合を肯定的回答割合としています。

【他地域】
同じ機会に調査を実施した、「同都道府県」「全国」の回答の平均値
※ 年度中の値は随時変動する点にご注意ください

1.総括表

５つの側面について、領域別に肯定的回答割合を示しています。

	主体性	協働性	探究性	社会性
①学習活動	74.6%	89.1%	84.5%	81.6%
②学習環境	95.9%	94.5%	90.7%	90.1%
③自己認識	72.7%	82.0%	77.0%	66.0%
④行動実績	87.0%	87.7%	73.9%	64.3%
⑤ウェルビーイング	63.3%	87.0%	78.3%	58.0%

2.強み・伸びしろ

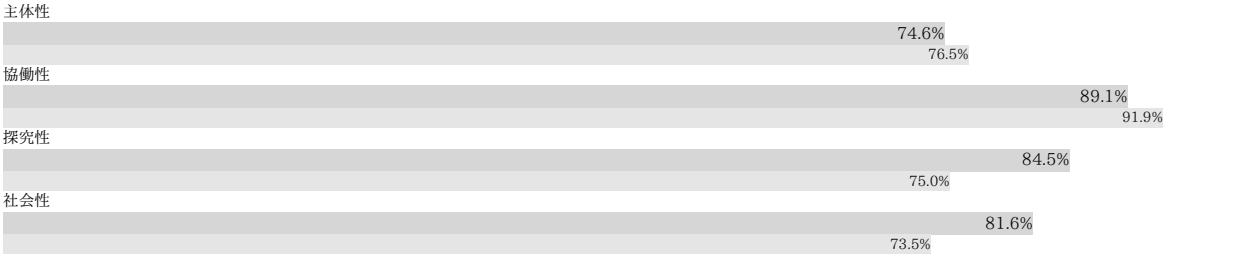
各側面に含まれる指標のうち、もっとも肯定的回答割合が高い指標（強み）ともっとも肯定的回答割合が低い指標（伸びしろ）を示しています。
※肯定的回答率が同じ複数の指標がある場合、設問番号が最も小さいものが表示されます。結果の詳細は「レポート（生徒）」にてご確認下さい。

	強み		伸びしろ	
①学習活動	8.活動、学習内容について生徒同士で話し合う	94.2%	16.日本や世界の課題の解決方法について考える	63.8%
②学習環境	20.失敗してもよいという安全・安心な雰囲気がある	97.1%	34.地域に、尊敬している・憧れている大人がいる	75.4%
③自己認識	43.自分とは異なる意見や価値を尊重することができる	98.6%	65.将来の国や地域の担い手として、積極的に政策決定に関わりたい	40.6%
④行動実績	72.自分の考えについて、様々な人に意見やアドバイスを求めた	94.2%	70.地域社会などでボランティア活動に参加した	44.9%
⑤ウェルビーイング	66.この学校に入ってよかったと思う	89.9%	89.日本の将来は明るいと思う	39.1%

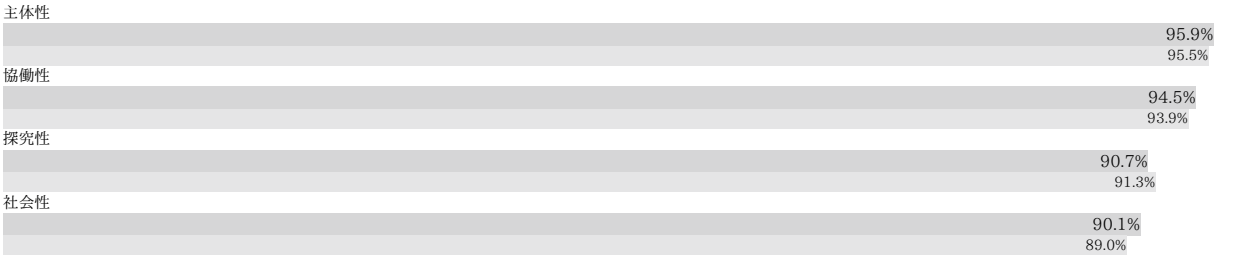
3.前回結果との比較

棒グラフ（黄色）が今年度の全校の結果、棒グラフ（グレー）が前年度の全校の結果を示しています。

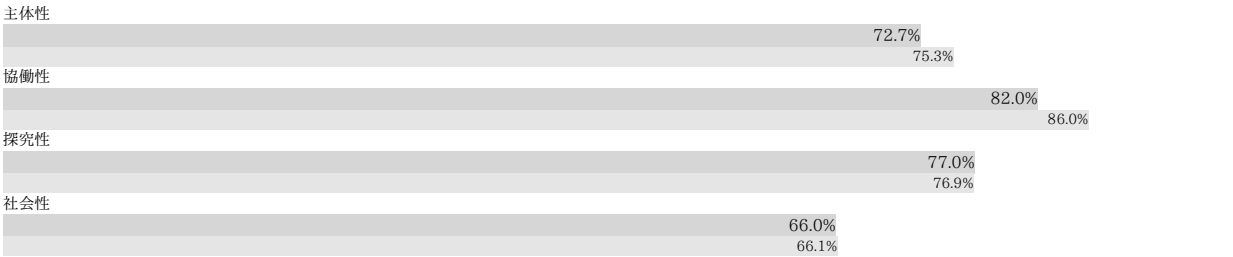
①学習活動



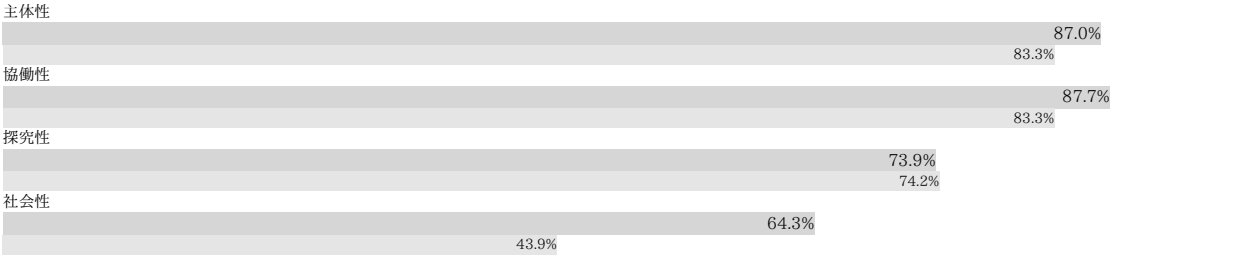
②学習環境



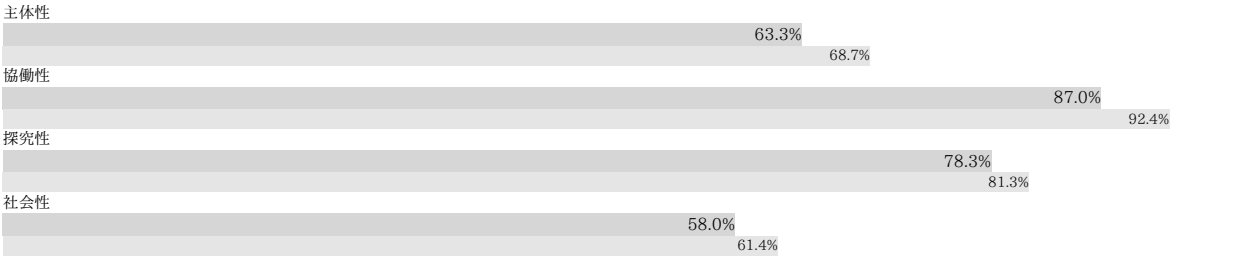
③自己認識



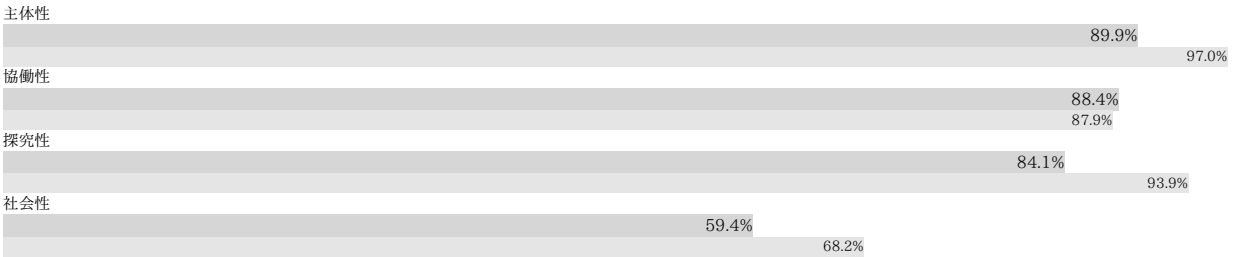
④行動実績



⑤ウェルビーイング



⑥総合的な満足度



第４部
今後の取組について

１．持続的な取組について

これまで本校が培ってきた校内指導体制や、築いてきた外部人材とのつながりを基盤にしながら、本事業での取組を維持・発展させるために、持続可能な組織及び実施計画を整備し、事業の継続を行う。また、全職員が校内研修を重ねながら協働して事業継続に取り組むことによって、その成果を共有し、本校が目指す生徒像の実現に向けた挑戦を続けていく。

⑴ＡＩ教材の導入による教科学習の個別最適化

ＡＩ教材については、令和７年度に小国町予算から援助いただき導入しているリクルート社のスタディサプリは全校生を対象に一人１台端末へ導入することとなっているため、活用方法について継続して研究を進めていく。個別最適な学びによる学び直しや学力向上のために、教科学習や朝学習でのＡＩ教材の活用の仕方を体系化する。

⑵教科等横断的な学びの推進

教科横断型授業については、令和７年度以降も各教科のシラバスに年間を見通した計画として位置づけ、全教職員の協働体制のもと継続実施していくとともに、カリキュラムへの位置づけを検討していく。また、「白い森人研修」を通して教員の授業力向上の一環として授業のブラッシュアップを図り、教科横断型授業を公開し、県内外への普及を行う。

⑶学校横断型探究オンライン合同授業の実施と進学希望者の学びの動機喚起

学校横断オンライン探究学習については、令和７年度も認定NPO法人カタリバと連携して実施していく予定である。また、本校は、全国高等学校小規模校サミットを今後も毎年開催することとしており、全国の多くの小規模校との交流は継続するので、取組について全国各地の小規模校を対象に連携について協議することが可能と考える。この取組をとおして、メタバース相談室や放課後交流会等への生徒の参加促進を図るとともに、大人の交流会によって教員間の交流を進め、情報共有や事例検討を重ねる。

⑷事業成果の発信による全国の小規模校が抱える共通課題の克服

評価アセスメントとして活用している（「高校魅力化評価システム」アンケート）を継続し、その結果を分析することで、教育活動等による生徒の非認知能力への効果を検証していく。また、全国高等学校小規模校サミットを今後も毎年開催することとしており、全国の多くの小規模校との交流は継続するので、取組について全国各地の小規模校を対象に連携について協議していきたい。

２．コンソーシアム等の関係機関等との連携・協力体制

「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」（令和元年度から３年度）において構築したコンソーシアムを基に、本事業でも地域探究活動を中心に多くの人々とつながり、関係機関との協力体制を築くことができた。コンソーシアム関係者は、総合的な探究の時間等を中心に積極的に教育活動に参画している。今後は、本校が特色としている地域とつながる地域連携事業や教科等横断型授業等の推進のため、コンソーシアム関係者にさらに積極的に参加していただく。また、探究学習・地域行事・インターンシップ等、学校外での地域活動における生徒の受け入れをコンソーシアム関係者に依頼するとともに、生徒のボランティア派遣等をさらに拡充していく。

３．県からの指導助言

取組の継続に当たり、実施校が専門的な指導・助言を必要とする際は、県教育委員会の担当指導主事が対応し、取組を支援する体制が整っている。

４．予算面・人員配置面での取組継続

○　町との協働

指定終了後も実施校は、町や町教育委員会と協働しながら取組を発展継続させることとなる。平成13年度から６年間、連携型中高一貫教育の文部科学省研究開発学校の指定を受け、それが終了した後、町と共に小中高一貫教育（平成30年度からは保育園を加えた保小中高一貫教育へ発展）へと発展継続させた実績がある。現在、保小中高一貫教育推進協議会より予算面でも支援を受けているため、事業継続が可能である。実施校は、令和６年６月に小国町及び東北芸術工科大学との３者による連携協定を締結しており、小国町で雇用しているコーディネーターの協力を得て取組を続けることとしている。

○　「小国高校を支援する会」との協働

必要となる費用については、現在も実施校に対し力強い支援を行っている「小国高校を支援する会」等と実施校が相談しながら検討する。

○　一般財団法人三菱みらい育成財団助成

令和６年度から３年間、一般財団法人三菱みらい育成財団から助成を受けている。

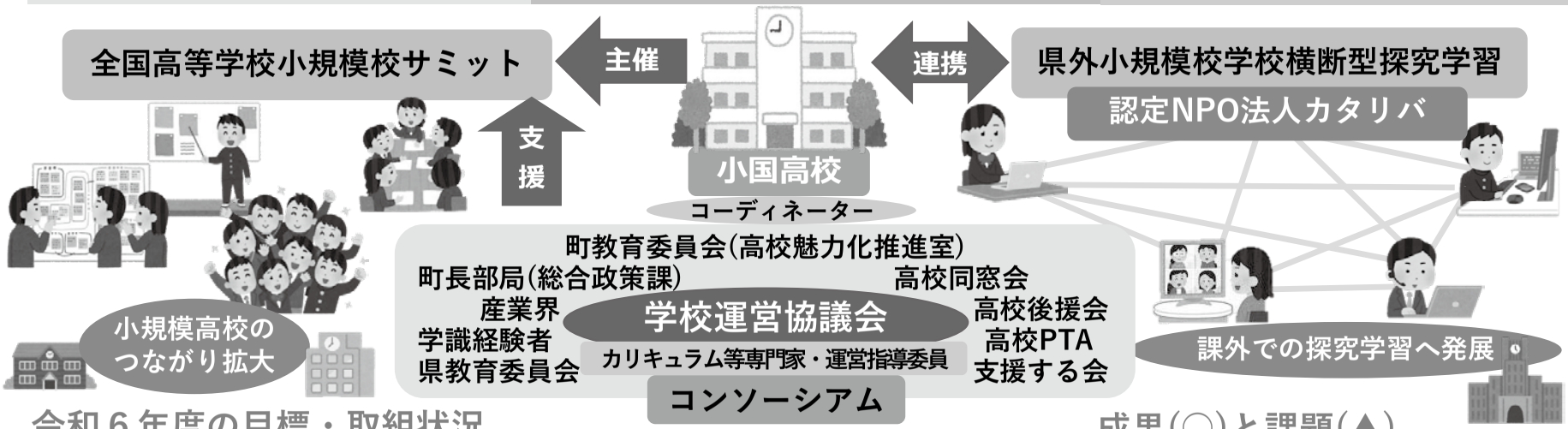
【山形県立小国高等学校】白い森未来探究プログラム

構想の概要

ＩＣＴ端末を用いた遠隔・オンライン教育を活用し、ＡＩ教材による個別最適化された学び直しと人的リソースや多様性を生み出しながら行う先進的な県外小規模校横断型探究学習の推進により、課題解決のための思考力･判断力･表現力等の資質･能力の育成を図る。

関係機関との連携・協働体制の構築方法

○小国町や小国町教育委員会との連携　○県外小規模校横断型探究学習のための連携　○連携協力を担うコーディネーター



令和６年度の目標・取組状況

		成果(○)と課題(▲)
①AI教材の導入による教科学習の個別最適化 (★昨年の取組み＋新たな取組み)	・Qubena(１年生)と今年度は２年生と３年生の進学系の選択者にtokuMoを導入 ・マイプラン学習に加え、授業外使用頻度の向上を目指し、朝学習や休憩時間での自学自習に利用	○生徒の基礎学力の定着や苦手な科目・分野への取組が促進した ▲学校としての体系的な使用方法を見出すことができなかった
②教科等横断的な学びの推進と探究学習の個別最適化 (★今年度の重点取組み)	・地歴・公民、家庭科を軸となる教科として実践 ・時事的な内容をテーマにチームを組んで実践 ・各授業担当者のニーズに合わせて実践 ・前年度の取組をブラッシュアップして実践	○生徒の多面的・多角的な考えや感想を引き出すことができた ▲カリキュラム全体としてではなく単発的な実践にとどまった
③オンラインコミュニティの構築と進学希望者の学びの動機喚起	・進学希望者のグループ化・講習・面談の実施(小国町の協力)	○面談による動機づけや講習実施が、学習意欲の喚起につながった ▲自学習慣をつける働きかけを要する

第５部
資料

1.運営指導委員会
2.実践報告会
3.全国高等学校小規模校サミット
4.報道

文部科学省「新時代に対応した高等学校改革推進事業」

（創造的教育方法実践プログラム）

令和 6 年度 第 1 回運営指導委員会

1 期 日 令和 6 年 6 月 3 日（月）

2 時 間 13 時 20 分～16 時 40 分

3 場 所 山形県立小国高等学校会議室 ※ハイブリッド開催(Zoom 利用）

4 出席者数 23 名

山形県教育局高校教育課主任指導主事、 山形県教育局高校教育課指導主事、小国町教育委員会教育振興課長、 小国町教育委員会高校魅力化推進室長、 小国高等学校教員、コーディネーター

運営指導委員 ： （50 音順）

阿部 剛志 氏（三菱 UFJ リサーチ＆コンサルティング株式会社）

稲垣 忠 氏（東北学院大学 文学部教育学科）

牛木 力 氏（一般財団法人つわの学びみらい 教育魅力化コーディネーター）

岡崎 エミ 氏（一般財団法人地域・教育魅力化プラットフォーム）

5 内 容

(1)授業参観：家庭科(家庭総合)×地歴公民科(公共)

授業テーマ「子どもを保護の対象から、権利の主体へ！ ~子どもの人権を考える「虐待」~」

(2)報告

(1)「高校魅力化アンケート」の時系列での傾向分析

(2)今年度の取り組み

(a)教科横断型授業について

(b)個別最適な学びについて

(3)個別最適な学びの現状と課題について

・各教科においての個別最適な学びの為に、具体的取組について各自検討後、グループ共有

文部科学省「新時代に対応した高等学校改革推進事業」

（創造的教育方法実践プログラム）

令和 6 年度 第 2 回運営指導委員会

1 期　　日 令和 6 年 11 月 25 日(月)

2 時　　間 15:45~16:45

3 場　　所 小国高校 会議室/zoom

4 出席者数 20 名

山形県教育局高校教育課主任指導主事、山形県教育局指導主事、小国高校教員、コーディネーター

運営指導委員：（50 音順）

阿部 剛志 氏（三菱 UFJ リサーチ＆コンサルティング株式会社）

牛木 力 氏（一般財団法人つわの学びみらい教育魅力化コーディネーター）

岡崎 エミ 氏（一般財団法人地域・教育魅力化プラットフォーム）

5 内容／指導・助言及び改善策の検討

(1)次年度に向けた課題について

(2 質疑応答

(3)その他

6 状況写真

文部科学省「新時代に対応した高等学校改革推進事業」

（創造的教育方法実践プログラム）

実践報告・公開授業　記録

1 期　　日 令和 6 年 11 月 25 日(月)

2 時　　間 12:50~16:45

3 場　　所 山形県立小国高等学校会議室 ※ハイブリット開催(Zoom 利用)

4 出席者数 32 名

運営指導委員 4 名、山形県教育委員会 2 名、小国町教育委員会 2 名、一般参加者 11 名、小国高校教職員 13 名

5 内　　容

1. 開会

2. 教科横断型授業参観
   (1) 教科・科目　　商業科(ビジネス基礎)×国語科(国語表現)
   (2) クラス　　3 年 1 組 科目選択者(11 名)
   (3) 場所　　学習室 1
   (4) 担当教諭　　松田明子 教諭/五十嵐遥佳 教諭

3. 教科横断型授業の協議
   (1) 授業者自評
   (2) 質疑応答
   (3) 講評
4. 創造的教育方法実践プログラムの取組報告について
   (1) 取組報告
   (2) 質疑応答
   (3) 講評
5. 閉　　会
6. 状況写真

第７回全国高等学校小規模校サミット　2024.7.25Thu（小国高校体育館）

目的：「自分の学校・地域の魅力を伝え合う中で自信をつけ、新たな課題を見つける」
「サミットを各地域のためのアクションを起こすきっかけにする」

テーマ：「気づき築き」　　グランドルール：「意見を尊重・肯定」「一議題一意見」

趣旨：全国の小規模高校の生徒が交流し親睦を深めると共に、各校・地域が抱える課題について意見交換し、将来それぞれの地域で活躍する資質や能力、協働意識を育成する。
大会主題：「今ここで起こっていることは、将来日本中で起こり得ること、小規模校だからこそできることがきっとある」～仲間と一緒に未来を考えよう～

〈当日の流れ〉
1.開会式　2.アイスブレイク　3.セッション１【パネルディスカッション】モデレーター：岩本 悠 氏　パネリスト：高校生４名
5.セッション２【参加校取組紹介】　6.昼食休憩　7.アイスブレイク　8.セッション３【生徒交流（ワークショップ）】
6.閉会式

〈小規模校サミットの軌跡〉
- 2017/12/15-16　岩手県立花泉高校との交流
  - 生徒「もっと交流したい」の声から企画
  - 東北芸工大 岡崎先生との出会い
- 2018/8/2　第１回（旧小玉川小中学校）１２校１０７名
  - 「生徒が企画・運営、大人は伴走」のスタイルが定着
- 2019/7/31　第２回（松風館）１７校１３２名
  - 荒砥高生が実行委員として参画
- 2020/11/14　第３回（オンライン）２１校１９４名
  - コロナ禍でもICT機器を活用しオンラインで初開催
- 2021/10/23　第４回（オンライン）２３校１９１名
  - オンラインの利点を活かし、事前の研修・交流を密に計画実施
- 2022/7/28　第５回（南陽市民体育館）１１校１０５名
  - ３年ぶりの対面開催！配慮しながらもリアルで会う喜びを実感！
- 2023/7/27　第６回（南陽市民体育館）１６校１２８名
  - ５年ぶりの小国町開催＋小国高校を会場にして初！
- 2024/7/18　プレセッション（オンライン）
- 2024/7/24　レセプション（小国高校）箸作り+夕食会(地元食材)+花火

〈参加生徒の感想〉
★自分の学校での課題と似ている課題が多くあって、そういう課題を深く考えるきっかけになった
★全然違う環境で育ってきた人たちのお話をたくさん聞いて、自分の環境についても話して、視野が広がった
★人見知りで、初めのうちは自分から話しかけられなかったが、段々と慣れていき自分から話しかけたり友達になったりと、自分が変われた気がした
★小規模校について話し合うだけではなく、友達になった人とインスタやLINEを交換して話せたのが嬉しかった
★今の小国高校でもできそうなことが学べて、実際にやってみたいと思えた
★地域や学校の魅力についてたくさん話し合えた

参加校 ８県１３校１１２名
（うち山形小国６９名、ゲスト４３名）
山形県立左沢高等学校
山形県立荒砥高等学校
山形県立遊佐高等学校
山形県立新庄南高等学校金山校
宮城県岩ヶ崎高等学校
福島県立石川高等学校
福島県立西会津高等学校
栃木県立那須高等学校
長野県白馬高等学校
広島県立油木高等学校
山口県立防府高等学校佐波分校
高知県立大方高等学校
山形県立小国高等学校

成果
- ❖自己成長と人間関係の構築〔コミュニケーション能力の向上／異なる地域や高校生と交流し、多様な価値観に触れることでの視野の拡大／自分の意見を積極的に発信し、グループワークを通して達成感と自信の獲得〕
- ❖高校や地域の魅力再発見〔自身の高校や地域の魅力を再認識し、愛着が深まる／地域貢献の重要性を実感／他高校の取り組みから学び、自身の高校で実践したい意欲の生起〕
- ❖小規模校の可能性の拡大〔小規模校ならではの強みや可能性を再認識し、今後の学校運営に活かしたい意欲UP／小規模校共通の課題や悩みを共有し共感／小規模校の未来への希望や期待を持てた〕

展望
- ❖サミット後のフォローアップ活動〔参加者同士の交流を継続する仕組みの構築〕
- ❖参加者の確保〔より多くの高校に参加の機会を提供し、多様な視点を取り入れる〕
- ❖サミットの深化・発展〔主催校の検討、サミットの変遷や効果の洗い出し〕

2024年10月作成資料

小国高で学ぶ意気込み

「留学生」9人、町役場訪問

小国町の小国高（山科勝校長）で本年度から学ぶ、いずれも県外出身の「地域みらい留学365生」「白い森留学生」計9人が10日、町役場を訪れ、仁科洋一町長らに町の印象や意気込みを語った。

9人は国の地域留学制度などを活用した。365生は東京都と埼玉県の男女3人で、出身高校に在籍しながら2年生の1年間、小国高に通う。白い森留学生は東京都と神奈川県からの男女6人。同校生として3年間、同校で学ぶ。いずれも入寮やホームステイをしながら勉学に励み、住民とも交流する。

仁科町長は町の歴史や産業の成り立ちを紹介し、「自然豊かな小国で、皆さんの能力を磨いてほしい」と激励。365生の染谷柚乃さん(16)＝埼玉県出身＝は「小国の人は温かい印象を受けた。7月に小国で開かれる全国高校小規模校サミットでの交流も楽しみ」と期待を膨らませた。

365生は8日の始業式で初登校し、白い森留学生は9日に入学式を迎えた。同校に通う留学生は、9人を含め19人となった。（坂元かおり）

記念写真に納まる小国高への「留学生」たち
＝小国町役場（同町提供）

令和6年4月12日
山形新聞
写真提供/山形新聞社

米に短期留学の体験や学び報告

小国高生、町長に

小国

米コロラド州デンバーに短期留学した小国町の小国高（山科勝校長）の生徒2人が1日、町役場を訪れ、仁科洋一町長らに異文化に触れた感想や学びなどを報告した。

2年の高橋安以太郎さん(16)と斎藤陽さん(16)の2人は3月8日から2週間、ホームステイしながら現地のイースト高の授業に参加するなどし、見聞を広めた。この日はホストファミリーやクラスメートとの交流の様子などをスライドで紹介しながら「試行錯誤の連続だったが、意思疎通ができた時の達成感は大きかった」「視野が広がり、もっと英語を学びたいと感じた」などと話した。仁科町長は「経験を糧とし、小国でさまざまなことに挑戦してほしい」と話した。

同校は国際学習に力を入れ、町や同窓会、後援会の支援を得て生徒の短期留学を実施している。（須藤仁）

短期留学での学びなどを報告した高橋安以太郎さん（手前）と斎藤陽さん
＝小国町役場

令和6年5月3日
山形新聞
写真提供/山形新聞社

事故や犯罪 注意してね

小国高生ら、小学校で活動

小国町の小国高（山科勝校長）生徒有志が、近くの小国小で事故や犯罪被害の防止に向けた啓発活動を繰り広げた。

小国警察署（森本和幸署長）と合同で取り組み、3年の飯田晴基さん(18)、いずれも2年の見川功真さん(17)、伊藤亜裟斗さん(17)、斎藤寧音さん(17)、染谷柚乃さん(16)が参加した。

5人は昇降口前で登校中の児童に向け、「おうちの方に行き先と帰る時間を教えてから遊びに行きましょう」などと、マイクで注意を呼びかけた。生徒がデザインしたイラストとともに「夏休みでもあいさつをしよう」などの注意事項を記したポケットティッシュも手渡した。（須藤仁）

登校する児童にポケットティッシュを手渡す小国高生＝小国町・小国小

令和6年7月23日
山形新聞
写真提供/山形新聞社

小規模校の可能性探る

小国高 8県13高校集いサミット

小国町の小国高（山科勝校長）による「全国高校小規模校サミット」が25日、同校で開かれ、本県や栃木、山口など8県13校の計114人が参加した。各校が小規模校ならではの特徴的な取り組みを紹介し、交流を深めた。

島根県教育魅力化特命官の岩本悠さんが講演し、「学校における一人一人の影響力は大規模校よりも大きい。新しいことをどんどん提案してほしい」と激励した。また、小規模校の価値や可能性について話し合うパネルディスカッションも行われた。代表生徒5人は「地域と学校が互いに支え合い、課題を解決していく必要がある」「文化祭は出展数が課題。小規模校同士で協力するのはどうか」などとそれぞれ語った。

各校は独自の実践活動や、地域と協働の取り組みを発表した。小国高3年飯田晴基さん(18)は「他校の面白い活動やアイデアを取り入れたい」と話した。

小国高が実行委員会事務局を務め、7回目。（根本光輝）

5人の生徒が意見を交わしたパネルディスカッション＝小国町・小国高

令和6年7月26日
山形新聞
写真提供/山形新聞社

地域資源循環 じっくり

首都圏の大学生7人 小国滞在、稲作や畜産現場視察

首都圏の大学生が小国町に滞在して地域の実情に触れる「域学連携事業」が、5日まで繰り広げられた。参加者は町内の稲作や畜産などの現場を視察して資源の域内循環について理解を深めたほか、地元の高校生と地域の魅力について意見を交わした。

地域の魅力について語り合った大学生と小国高生
＝小国町・スポーツ交流センターアスネット

小国高生と魅力語り合う

町と大学が連携して地域資源の活用を考える事業をきっかけに始まった取り組み。早稲田大を中心とした学生が町を訪れるなどの交流が続いており、今回は早大と法政大の学生7人が2日に来町し、牛ふんの堆肥化や敷料としてのもみ殻利用などについて知見を広げた。

スポーツ交流センターアスネットで3日に開かれた交流会では、小国高生8人を交え、地域の魅力について語り合った。大学生は地域の食や景色の感想とともに、視察先での体験を踏まえ、「住民同士のつながりを生かした取り組みはサステナブルだと感じた」と語った。高校生も豊かな自然やマタギ文化などを紹介して打ち解け合った。

早大4年馬屋原瑠美さん(22)は「視察先の『助け合いだから』との言葉が印象深い。地域で資源が循環する仕組みの根本を感じることができた」と話した。小国高2年伊藤亜蛟斗さん(17)は「見慣れた景色などを良い面として挙げてもらい、地元を見直すきっかけになった」と気付きを得たようだった。（須藤仁）

令和6年9月6日
山形新聞
写真提供/山形新聞社

フランスの籠作り 高校生が文化学ぶ

2人、10日間滞在

小国

小国町の小国高（山科勝校長）の生徒とフランス人との文化交流会が同校で開かれた。フランス人の2人の籠作家らから、日本との生活様式や食文化の違い、籠作りの技術などについて学んだ。

フランス在住のファブリス・スラフィノさんと、ステファン・フォレドゥローさんの2人が、小国町の籠作家柳沢茜さんとフランスで出会った縁で、9月上旬に同町を訪れた。町内でワークショップを開くなどして10日間過ごし、滞在最終日の20日に同校を訪れ、3年生20人と触れ合った。

柳沢さんが今年5月にフランスでワークショップを開き、1カ月ほど過ごした生活を説明した。フランス人の2人に質問を挟みながら、友人がそろった時によくガーデンパーティーを開催すること、おにぎりを作ったら具材はツナマヨが好まれたことなどを紹介した。最後にファブリスさんとステファンさんが、フランス産の柳の木で籠を作り、生徒に編み方を教えていた。

伊藤琥次郎さん(18)は「フランスの文化を学べる良い機会になった。2人が作る籠の編み目が細かく、高い技術だと感じた」と話した。（根本光輝）

小国高の生徒に籠の編み方を伝えるフランス人の2人
＝小国町・同校

令和6年9月30日
山形新聞
写真提供/山形新聞社

小論文最優秀賞に
小国高の染谷さん
米沢有為会コンテスト

米沢有為会（平山英三会長）が主催する置賜地区高校生小論文コンテストの表彰式が10月26日、米沢市のホテルモントビュー米沢で開かれた。最優秀賞の小国高2年染谷柚乃さん(16)をはじめ入賞者11人に表彰状が贈られた。

表彰状を受け取る受賞者＝米沢市・ホテルモントビュー米沢

人口減少の中、地域と自分の未来を考えるきっかけにしてもらおうと、置賜地区の高校2年生を対象に作品を募っている。今回は、4校から97点の応募があった。染谷さんは、留学生として小国町で生活する中で、交流の重要性に気付いたとし、自らもイベントを企画する意欲を披露。「交流を通して町を好きだなと思えることが、故郷を残す一歩になる」などとつづった。他の入賞者は次の通り。

▽優秀賞＝井手吾南（小国）佐々木莉珠（同）高橋都（米沢中央）星知里（同）

▽入選＝鈴木玲佳（米沢中央）八巻涼雅（同）吉田悠香（同）竹屋水葵（長井）奥田美佳（米沢中央）小島未裕（同）

（大坪千絵）

令和6年11月6日
山形新聞
写真提供/山形新聞社

国境を越えた絆育む

小国高 インドの学生訪問団と交流

小国町の小国高（山科勝校長、70人）は今秋、インドの学生訪問団を受け入れ、1週間にわたる交流を通じて国境を越えた絆を育んだ。同校は生徒のコミュニケーション力向上に加え、世界の多様性に触れる貴重な機会になったとして、今後も各国・地域の学生の滞在学習と交流を受け入れられるよう、国際的視野を意識した授業を進めていく考えだ。

訪れたのは同国西部・グジャラート州にある大学入学前までの12年制学校「アナンド・ビディア・ビハール（AVV）」で学ぶ12～19歳の男女12人。学生は10月30日～11月5日に、小国高で英語、国語、数学、家庭、地理歴史といった全8教科の授業に参加し、町内のスポーツ交流センターアスネットや小国高生の寮、町民宅に宿泊した。

小国高生は1、2人でインドの学生1人を担当する「バディー制」で、授業を含む滞在生活全般をサポートした。日々のやりとりは英語。バディーを務めた生徒たちは単語を調べながら、身振り手振りを交えて意思疎通を図った。2日目以降は言葉の壁が気にならなくなったといい、インドの暮らしを聞いたりした。放課後は折り紙を手ほどきする場面もあった。一緒に芋煮会も楽しみ、米沢市の上杉神社や南陽市の熊野大社を巡るなどして、親睦を深めた。

折り紙で交流する小国高生とインドの学生＝10月30日、小国町・小国高（同校提供）

国際的視野 今後も意識

1年高橋明杜さん(15)は「インドも日本も同世代の感性は似ている。英語の出来よりも、相手に伝えようとする姿勢が大事だと分かった」と自信を深めた。3年塚原朱李さん(17)は別れ際に涙する学生たちの姿に「とても感情豊かで、私たちとの出会いを大切にしてくれていることがうれしかった」。インドの友人とは今も交流サイトで連絡を取り合っているという。

交流の端緒は舟山知美教頭が昨年、アジアの学生が集まる会議でAVVの校長と同席したこと。AVV側の申し出で小国訪問が実現した。舟山教頭は「日本を訪れたいという海外のニーズは、私たちが考えている以上に高い」と話す。留学のように海外に出向くだけでなく、諸外国の学生を受け入れる素地を整えることが、活発な国際教育の実現につながると強調した。

小国高では、そのポイントを国際的視野だと捉えている。受け入れを経験した教員が異動した場合でも次に対応できるよう、英語だけでなく他教科を含め、国際的視野を意識した授業に取り組んでいく方針だ。

（上妻大晃）

令和6年12月14日
山形新聞
写真提供/山形新聞社

令和6年12月18日
山形新聞
写真提供/山形新聞社

情報を読み解く大切さについて理解を深めた読み方講座 ＝小国町・小国高

情報読み解く力 大切

小国高で読み方講座

考えるチカラは知ることから
1学級1新聞

地方創生などをテーマに山形新聞社が提唱する「1学級1新聞」を導入している小国高（小国町、山科勝校長）で17日、新聞の読み方講座が開かれた。学年ごとに参加し、合わせて約70人が新聞を活用して情報を読み解く大切さについて理解を深めた。

山形新聞の須藤仁長井支社長が講師を務め、同日付の本紙などを用いて紙面構成や記事の書き方などを紹介した。正確なニュースを見極めるメディアリテラシー（情報を読み解く力）の重要性を説き、「さまざまな情報を読み比べることが大切。新聞に目を通す習慣を付けて視野を広げてほしい」と呼びかけた。

3年飯田晴基さん(18)は「新聞の役割を知ることができた。日々目を通して社会の動きを深く理解し、日常生活を豊かにしていきたい」と話した。生徒は過去の掲載記事を基に見出し作りにも取り組んだ。

県内高校を対象にした1学級1新聞事業は山形新聞社OBの故鈴木正氏の篤志で設立された「鈴木基金」を活用し、趣旨に賛同する企業の協力を得て2017年に始まった。同校は日本新聞協会のNIE（教育に新聞を）実践指定校に選ばれている。（須藤仁）

▼SDGs「Sustainable Development Goals（持続可能な開発目標）」の略称。国連加盟国が採択した目標で、「質の高い教育をみんなに」など17項目を掲げている。教育格差の是正などを目指す本紙提唱の「1学級1新聞」の趣旨と合致する。

令和6年12月24日
山形新聞
写真提供/山形新聞社

琴の授業 小国高生が先生

児童に演奏方法など教え交流

児童に琴の弾き方を教える小国高生 ＝小国町・小国小

小国

小国町の小国小（後藤和枝校長）で20日、小国高生による琴の授業が行われた。高校生が琴の弾き方を教えることなどを通し、5年生の児童約40人と触れ合った。

同高で音楽を履修した1～3年生9人が指導役を務めた。班ごとに分かれて音楽の授業に参加し、爪のはめ方や楽譜の読み方などを教えた。「さくらさくら」の演奏に挑戦する児童に「強く弦をはじいて」「リラックスしていいよ」などとアドバイスしていた。

同高2年伊藤亜裟斗さん(17)は「演奏方法を分かりやすく伝えるのが難しかったが、みんなの吸収力が高くて驚いた」と話した。初めて琴を演奏した前田佑也さん(11)は「最後に弾けるようになって楽しかった」と話した。（根本光輝）

令和7年1月29日
山形新聞
写真提供/山形新聞社

高齢者宅を訪問し 除雪ボランティア

小国高生

雪かきが困難なお年寄りの力になろうと、小国町の小国高（山科勝校長）の生徒有志7人が1月31日、町内の高齢者宅で除雪ボランティア活動に取り組んだ。

同校1、2年生と町教育委員会、町社会福祉協議会の15人ほどが参加した。2班に分かれ、1人暮らしの高齢者宅をそれぞれ訪問した。同協議会員らが屋根から落ちた雪の山をスコップで崩し、高校生は雪をスノーダンプで運び出していた。

生徒たちを迎えた同町岩井沢、無職斎藤竹美さん(86)は「今年は雪が多いので、若い人に手伝ってもらいありがたい」と感謝していた。2年斎藤軍音さん(17)は「少しでも助けになればと思い参加した。大変だけど役に立ててうれしい」と話した。同協議会が同校に協力を依頼し、毎年行っている。（根本光輝）

除雪ボランティアに取り組む小国高の生徒＝小国町岩井沢

令和7年2月4日
山形新聞
写真提供/山形新聞社

世界との違い 理解深める

小国高 言語や文化学ぶワークショップ

世界の言語や文化などを学ぶワークショップが24日、小国町の小国高（山科勝校長）で開かれ、1年生17人が日本と各国との違いや社会問題について理解を深めた。

国内外で外国人支援に取り組む認定NPO法人IVY（山形市）の阿部真理子理事が講師を務めた。阿部さんは国ごとの人口、二酸化炭素（CO_2）排出量、プラスチック廃棄量をランキングで紹介し、「日本の1人当たりのプラスチック廃棄量は世界上位だ」と述べた。

内戦が続いているシリアでは、子どもたちが週に3日ほどしか学校で授業を受けられていないと説明した。「アイビーは学校を設けるなど支援に取り組んでいる。自分の夢を実現するため、シリアの子どもたちはうれしそうに学んでいる」と伝えた。高橋優衣奈さん(15)は「勉強したくてもできない子どもたちがいることを知り、教育環境のありがたさを感じた」と話した。総合的な探究の時間として行った。（根本光輝）

世界の言語や文化などを学んだワークショップ＝小国町・小国高

令和7年3月5日
山形新聞
写真提供/山形新聞社

特色ある学び「達成感」

小国高 県外出身者ら活動報告

小国町の小国高（山科勝校長）の生徒の活動報告会が2月27日、同町のおぐに開発総合センターで開かれた。県外出身の「地域みらい留学生」を含む計10人が同校ならではの学びについて発表した。

生徒たちは地域住民と対話し、実践を通して学びを得る「白い森未来探究学」や、生徒主体で開催した「全国高校小規模校サミット」など同校の特色ある学習を紹介した。「コンニャクを作ってみたいという思いから、地域の人とコンニャク芋を栽培した。貴重な経験になった」「サミットを一から運営するのは大変だったが、最後は達成感を味わえた」などと感想を述べていた。

東京出身で同校に3年間通った3年佐藤秀亜さん(18)は、海外留学や同校でインドの学生訪問団と交流した経験を挙げ、「将来の夢や進路を選択するきっかけになった」と話していた。学習活動を地域住民に知ってもらおうと開催し、約50人が来場した。（根本光輝）

小国高での学びを発表する生徒＝小国町・おぐに開発総合センター

第7回全国高等学校小規模校サミット